

ダンジョンで安寧を求  
めるのは間違ってるだ  
ろうか

ステラ・グローリア

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

原作よりかなり昔

ダンジョンに生まれた異端児の一匹の狼

そんな狼に芽生えた自我……ではなく宿つた魂

死にたくはないし取り敢えず自由に生きていこうとする

一匹の狼の物語

特になにも考えてないので変なところがあると思いますが

指摘があれば調べて修正しようと思います

他の二次創作読んでたら何か書きたくなったので筆を取りました  
モンスター側に転生をあまり見かけなかつたので、何かイレギュラーな感じのモンス  
ターいたら面白いかなと思つて書いてみてますが原作知識ありません

アニメしか見てないですし外伝も見てないですが何か勢いに任せて書いていこうか  
と思います

1話から時系列かなり飛ばします  
順次設定を追加して加筆いたします

# 目次

## 第1章

プロローグ ダンジョンに生まれたイ レギュラー	33	6話 私！アイズ！奇妙な関係？	28
1話 え？ナニコレ？街ができるる！？ 取り敢えず逃げよう	1	7話 何これ？ドラゴン！嫌な気配！	
2話 しつこい！嫌い！もう寝たい！？ 12	6	8話 私・ファミリア・神様登場？	
3話 ちょっと！魔法！？それ反則！？ 18	50	9話 私・名前・くじ引き？	33
4話 無茶はあかんよ！アイズたん！ 1話 出会い	62	10話 私のオラリオ生活？未知との 出会い	55
5話 足跡？狼？なんやそれ？ 可愛いわあ！	24	11話 運命の出会い	68
6話 口ボの怒り、応報の刻	62	12話	

## 第1.5章

			第2章	74
13話	オラリオの復讐者			
14話	ロボと冒険者依頼			
15話	迷宮混迷			
16話	復讐者			
17話	w h i t e r a b b i t			
115				
18話	豊穣の女主人			
19話	小兎の意地			
20話	アイズの葛藤			
21話	アイズの休息日、私の1匹歩			
147	138 132 120	102 94 87	82	

2 9 話	2 8 話	2 7 話	2 6 話	日常 · · · 日常?	決意	怪物祭 2
宝玉	混乱	發生				
195	187	183	177		172	167
					160	156



# 第1章

## プロローグ ダンジョンに生まれたイレギュラー

私は狼である

同族を見たことがない為、私自身どんな呼称があるのか分からぬけど、とにかく狼である

名前は未だない

気がつけば私は洞窟のような場所に一匹でいた

所謂、転生というものらしいのだが、狼に転生してしまつたらしい

この洞窟は小鬼等が壁から生まれてくる。私もきっとそうやって生まれてきたのだ  
ろう

生まれて直ぐに私の意識があつたのか既に幾ばくかの時が過ぎたのかはわからないが私が此処にいることだけは確かだ

暫くボーッとしていたら小鬼共に襲われた

小鬼共はどうやら私の敵であるらしい。鬱陶しいことこの上ないがとりあえず撃退しておくとしよう。意識が生まれたばかりで死にたくないし

弱い！小鬼共弱い！

軽く足で薙いだだけで近くにいただけで当たつてない小鬼まで消し飛んだ  
どうやら私はかなり強いらしい

私が生まれてどれだけの時が過ぎたのだろうか

日がな一日歩き回っては壁から生まれる雑魚を蹴散らし階段を下りたり上がりたりしているうちに元々いた階層を忘れ結局降り続けては妙に強くなったり大きくなつていく邪魔者を排除し続けた

ある程度降りた頃、階段に近付くと同時に私の倍くらいのやけに馬鹿デカイ巨人が壁

から生まれた

倒した、うん、倒せてしまつた

結構ギリギリで一回でも当たれば危なかつたけど何とかなつたから良しとしよう  
当たつたときの事とか考えたくない

階段を降りるとそこは大自然だつた

これ迄の階と違ひ青々と茂つた草木があり光がありそして水があつた  
そして此処にはあの邪魔な奴等があまり見当たらぬ  
臭いも中央にあるデカイ木の近くに数匹程度、殲滅すれば問題ない  
此処を住みかにしよう

この階が私の楽園だ

それからの私の行動は早かつた

木の近くに屯していた鹿や太つた人形を一匹残らず駆逐する

最近コイツらの中にある石つころ、此れを偶然食べてしまつたのだが食べると力が沸

いてくる気がする。気がするだけで気のせいかもしれないけど取り敢えず最近は倒したら食べる事にしている

その後は水辺で体を洗う

離れたところに島があつたが今は無視しよう  
どうせ用などないのだから体を乾かす方が先だ

自然のなかを走つて走つて走り続ける

生まれてから思うままに走つたことはなかつたが

楽しい！

コレは良い！

思う存分走ろう！

気の済むまで走るとしよう！

邪魔するというなら轢き殺す！

私を止められるものなら止めてみろ！

走つてゐる間に何度か下の階から客が來たが宣言どおり轟き殺し走り続けた  
何やら暗くなつたり再び明るくなつたりと時間経過で明るさが変わらるようだが関係  
なく走り続けた

満足して止まつた頃には既に十回は明滅を繰り返しただろう

我ながら馬鹿だと思うが楽しかつたのだから仕方がない

取り敢えず疲れたから寝るとしよう

今宵はぐつすりと眠れることだろう

そして私は森の奥深くで眠りに着いた

# 1話　え？ナニコレ？街ができるる！？取り敢えず逃げよう

私は狼である

名前は未だない

どれだけの時が過ぎたのだろうか

眠つていた私には分からぬが確実にかなりの時が過ぎたんだろう

その証拠に

何か島に街が出来てる！？

おかしい

確かに私が眠りにつく前は街どころか人っ子一人居なかつた筈なのだ  
そもそも目を覚ました時点でおかしかつた

いくら森林の奥で寝ていたからつて雑草が毛に絡まつてゐるわ木の葉で全身覆われて

るわ洗った筈の全身が異様に汚れてるわで逆に良くそんなになるまで寝ていられたものだと驚きが隠せない

何はともあれ先ずは人間達に見つからないよう体を洗おう  
生前はともかく、今の私はモンスターっぽい狼になのだから、見つかれば騒ぎ間違いなし!

いつからか使えるようになつていて透明化を使いLet's Sneaking!

寝起きで多少の衰えはあるだろうが臭いが分からぬ程じゃない。人間の臭い（多分）のしない方へしない方へと移動しながら水辺へと足を進める

何とか見付からずに水辺へとたどり着いた

水辺の地面や岩に体を擦り付けるが流石に汚れがヒドイ

黒ずんだ水が流れていくにしたがつて私の白い毛並みが現れる

自画自賛だがこの毛色は私の自慢である

残さず洗い流さなければ気がすまない使えるものは全て使つて全身を洗浄する

さて、後はどうしよう

人間に見付かつたらどうなるか分からない  
だから出来る限り見付かりたくない

下に降りる階段の場所は人間の臭いが濃いから多分使えない  
森の中はいつ人間が来るか分からないし透明化も森の中じや木の葉が降つただけで  
バレるからいつまでも使える訳じやない

最悪、森ごと焼け出されるかもしねないし  
なら上に上がる？

人の臭いが無いときなら多分見付からないだろうし透明化なら余程鼻の良い奴が強  
者でなければ直ぐにはバレないだろう

という訳で巨人のいた階層で戦闘中

階段を上がりきつたところでまた巨人が生まれてきたのだが一度戦つたことのある相手だ。少し体の動きが鈍いけど攻撃の予備動作も大体は把握済みで下手な横やりでもなければ負けることは無い

取り敢えず久々の食事としよう

食べるには石つころだけど

さあ、いざ行かん！

人間に会わずに済む未開の空間へ！

嗅ぐ

人間の臭いがしない方へ！

歩く

モンスターが生まれた！ 補食した

嗅ぐ

人間が来た！ 進路変更＆全速前進！

モンスターハウスだ！

取り敢えず轢き殺せー！！

忙しい！

ゆっくり安全に暮らしたいのに何でこんなに忙しいのさ！走りたいときに走りたいのに別にそうじやない時に走るのは嫌なのになあ

人間の少なさで言えばこの辺りの階層にいるべきだけど縦穴が邪魔である。一度寝てる間に落とされて痛かつた

透明化も火を吹く犬には意味なくて危うく毛が焼かれそうになつた

上方にいた犬面の小鬼擬きならなんとかなるかな？っていうか上の奴等弱いしちよつと鬱陶しいだけで寝るにはそこまで邪魔じやないかも？

良し！それで行こう！

そうと決まれば上へ行こうじゃないか！

邪魔をするなら人間だろうと轢き殺す！

あ、やっぱなし！

元とはいえ私も人間だもの！

というわけで人間は無視！

全力回避で上層へ全力疾走！

## 2話 しつこい！嫌い！もう寝たい!?

私は狼である  
名前は未だない

あれから上の階へと向かい続けて幾星霜

まあ、そんなに経つてはいらないんだけど周りに小鬼や犬つころ、変なトカゲなんかしか生まれない階層へとたどり着いた訳なんだが

人間が多い!!

どうもこの洞窟、ダンジョンだつたらしい。出入口の階段近くで研修中？みたいな人間達が話しているのを聞いたことがある

人間達はダンジョンに住むモノを総じてモンスターと呼び、それを狩っているらしい

普通の生物は存在しないらしく何度か私も寝そうな所を見つかっては追いかけ回された

勿論なにもせず逃げ切ったがね!

殺人、傷害は犯罪です!

モンスターを狩る理由としてどうもモンスターの中にある石つころを集めているらしい

何に使うのかは知らないけど多分人間達にとつては必要なのだろう  
何もしてないのに狩の対象にされる私にとつては傍迷惑なんだよ!

取り敢えず人間の臭いがかなり少ない場所を見つけた為、そこを仮の住みかとしている  
わけだけど極々たまに人間の臭いが近付いて来る度に透明化してやり過ごしていた

そんなある日、眠気もあり油断していたのだろう  
金髪の小さな人間の童に見付かってしまった

私は全高だけでも娘の三倍近くの大きさの筈なのだがその童は怖がるでもなく躊躇いなく斬り掛かつてきた。しかも無表情

眠気なんて吹き飛び緊急回避！

無表情で斬り掛かつてくるなんてこの子怖い！

そこから先は鬼ごっこだ

普通に走つて逃げていれば引き離すのは簡単だけど以前にそれで人間が疲れた所を他のモンスターになぶり殺しに成つていたことがあつた。かなり後味悪い鬼ごっこに成つたのを覚えている

この童がそうなつた時の後味の悪さはあの時の比ではないだろうから前方の邪魔な小鬼共を轢き殺しながら付かず離れずな距離を保つて逃げるのだけど

驚いたことにこの童、今は私しか見えていないのか周りへの注意力が欠片もない上から襲い掛けかかるトカゲに気付いていないこともありその度に方向転換し童の上を飛び越え序でに潰しているがそれでも何度もヒヤヒヤさせられている

そしてとうとう転けた

あれだけ周りを見ずに行動していたのだから当たり前と言えば当たり前のだろうがそのまま動かないのは疲れたのだろうか？

まあ、なんにしろ

やつと！休める！

この童しつこ過ぎ！

普通あれだけ追い付けなかつたら諦めなさいよ！ちょっと！聞いてんの？金髪童！

私もよほど疲れたらしい

そんな出来もしない思念伝達的なことをしようとしているのだから少し休むとしよ

私が近くに居れば他のモンスターも少しは寄り付かないだろう

まつたく、迷惑な童だよ

本当に

「モンスター……コロ……きなきや……お父さん……お母さん………」

疲れて殆ど意識もないだろうに譖言のように呟いては手だけは剣を握り続ける童

小さな童がこんな危ないダンジョンにまで来て剣を振り回すのにはどんな事情があるのか私は知らないし知りたいとも思わない

でも倒れるまで剣を振り倒れてまで剣を振ろうとする童がこんなところで死んで良いとも思わない

こんな状態じや意識が戻ったところでろくに動けもしないだろうし面倒だけど……送つてやるか……

別に童の為ではないぞ！

私が最近見ていた人間は皆、もつと年老いていたのだからこの童とてそのくらい生きているべきだと思つただけであつて断じて違うぞ！

童との鬼ごっこが思いの外楽しかつたとか思つておらんぞ！  
むしろ怖かつたわ！

なんだあの童は！

はじめの方は無表情で追い掛けて来て怖いわ。次第にムキに成つてブンスカ怒つた

り叫びながら必死に追い縋つて!

つて私は誰に言い訳してるので!

もう良いなんか疲れた。送ろう。早く送つてしまつて寝るとしよう

服を咥え背に乗せ上階に送つた

外は既に夜だつたのだろうか幸いにも他の人間に遭遇することはなかつた

### 3話 ちよつ！魔法！？それ反則！？

私は狼である  
名前は未だない

童を送り届けた時、ダンジョンの外にまで出たのだが物凄く発展していく驚いたものだ

遥か昔となるのだろう寝る前にも一度だけ外に出てみたがこんなに発展した街は存在していなかつた

いつたい私はどれだけ寝ていたというのだろうか？良く見付からなかつたものだ。  
いや、見付かっていながら無視されていたのかもしれないが

まあ、当事者とはいえ寝ていたのだから真相は闇の中だろう。当時の事を知る者など既に生きてもいないのだろうし気にするだけ無駄だろう

良し！帰つて寝よう！

翌々日、童がやつて來た

今日はなにやら盾を持つた太くちっこい髭面のおっさんが一緒にいるんだが……このおっさん強い！

勝どうと思つたら殺す氣でいかなきや怪我する処じやないつて本能的に理解できてしまう

さて、逃げよう

あのおっさんがいるなら振り切つても問題ないだろう  
そうと決まれば

L e t , s e s c a p e !!

速つ!?

ほんの2日程度で童が何か速い!

一昨日より少し速い程度で逃げたら直ぐに追い付かれるわ斬られそうになるわで  
ビックリして変な避け方して態勢が崩れた瞬間おっさんが来て盾で潰されそうになる  
わで死ぬかと思った!

そのくらいじや死なないけども!

それからは全速力での逃亡である

今日は全然楽しくなかつた!

やつぱりあの童、怖い!

その日から毎日あの童は私の所に来てはおっさんが止めるのも無視して私を追い掛け  
してきた

ある時は折れた剣を振り回し

ある時はボロボロな状態で折れた剣を振り回し

ある時は新品の装備で剣を振り回し

ある時は返り血まみれで剣を振り回し

ある時は文句を言いながら剣を振り回し

e t c . e t c . e t c . . . .

ある日、毎日飽きることなく上層だけだがどの階層にいようと必ず私を見付けては剣を振り回しながら私を追い掛けってきた童が来なかつた

怪我をしていても関係なしに私を追い掛け回していたのにどうしたのだろうか?  
そんな事を私は五階層の片隅で丸まりながら考えていた

どうやら私はゆっくりしたいと常日頃から思っているにもかかわらず童が私の元へ  
することを楽しみにしていたらしい

今日は来るだろうか

あの童、名前はなんなのだろう

ダンジョンに何をしに入つたのだろう

私を追い掛け楽しいのだろうか

なにで笑い、なにで泣くのだろうか

何で私を殺そうとするのだろうか

気が付けば童のことばかり考えていた  
今日も童は来なかつた

次の日、童が誰かを連れてやつて來た  
それだけで少し嬉しくなつた私は結構単純なのかも知れない  
そしてまた鬼ごっこが始まる……筈だつた

「終末の前触れよ、白き雪よ。黄昏を前に風（うず）を巻け。閉ざされる光、凍てつく大  
地。吹雪け、三度の嚴冬——我が名はアールヴ！」

【ワイン・フィンブルヴェトル】

ナニコレ!?  
寒つ!?

童が連れてきた誰か……緑色のお姉さんが何かを唱えた瞬間、急に白くて冷たい風が発生し周りが氷始め私は全力で逃げ出した

あれは本気で死ぬかと思つた

あれは唱えさせてはいけない

唱える前に止めなければ絶対に勝てない

そう思わされた

この日、私は階層を移動しながら透明化を併用して全力で逃げ続けた

## 4話 無茶はあかんよ！アイズたん！可愛いわあ！

ウチは口キ

口キ・ファミリアの主神口キや

今日、ウチは野暮用で外に出とつたんやけどオラリオの北側の拠点にしとる『黄昏の館』に帰つてみたらなんや妙にソワソワしたりヴエリアがブツブツ呟いとつた

アイズたんの名前が聞こえけどまた授業ボイコットでもしんたんやろか？

そやけど時間的には夕食の時間の筈なんよなあ、取り敢えず茶化しといたらええやろ

「なんやリヴエリア、またアイズたんに逃げられたんか？アイズたんも懲りんなあ。そういうとこも可愛いんやけど」

「口キか、アイズがもう授業から逃げないのはお前も良く知ってるだろう」

アイズは一度だけリヴエリアの授業から逃げたことがあつたからこそこの茶化し方を選んだんやけど外してもうたらしい

ウチはもうこれかも知れんって答えは考え付いとる  
せやけどそれから目を背けた

「そらそらや。ほんならアレか！風呂から逃げたとかや！」  
「…ダンジョンではぐれたらしい」

背けた目は一瞬で戻された

いや、まあそんな気はしどつたけど

今日は他のメンバーとパーティーを組ませたらしいけど最後の戦闘を終えた後、魔石  
やドロップの回収をしてる間におらんようになつとつたらしい  
近くを少し捜索しても見付からんかつた言うて先に帰つてもうた可能性に期待して  
戻つてきたけどおらんかつたと

「どう考へても一人で潜り続けるやん！いつかやつてまうんやないかなあとは思つ  
とつたけどよりもよつて今日かいな。リヴエリアがまだ此処におるつちゅうことは  
誰が探しに向かつたん？」

「報告を受けて直ぐにフィンとガレスが飛び出していった。私は行き違いで戻つてきた

時のためには残れとフインに言わされた』

完全に迷子の子供を待つとる母親やわ

それにしてもアイズには無茶はしたらあかんて言うとつたんけどなあ。今度やつたらなんか罰則考えとつた方がええかなあ

そんな事を考えとつたらフイン達が帰つてきよつた

「リヴエリア、アイズの治療と着替えを頼むよ」

「……わかつた」

疲れたんやろうなあ。眠つとるアイズたん可愛いわあ。添い寝とかしたいんやけど

確実にリヴエリアに怒られるやろうしなあ

「終わつたら執務室に来てくれ。報告しておきたいことがある」

言うこと言うたらフインはガレスを連れてそのまま執務室に直行

アイズはリヴエリアにお姫様抱っこされてそのまま廊下の角に消えていった  
さて、どんな話が飛び出て来るんかな  
もしもアイズたんを襲つた連中がおつたとか言う話やつたら何がなんでも見つけ出  
して主神ごと殺したるわ

## 5話 足跡？狼？なんやそれ？

ウチは口キ

口キ・ファミリアの主神口キや

一人で離れて単独行動しどつたアイズをフインとガレスが連れ帰った後、報告がある  
言うてウチらはフインの執務室に集まつとる

居るんはウチ、フイン、ガレス、そんでアイズを部屋に運んでから來たりヴエリアや  
「ほんで？リヴエリアも來たことやしそろそろ報告を聞こうやないか。ダンジョンでな  
にがあつたんや？」

フインがこうやつてウチと幹部だけを集めたんや  
アイズを見付けた時か見付けに向かう過程で何かあつたんやろ他には伝えられん何

かが

「そもそも僕達はダンジョンに潜つてないんだよ。僕達はダンジョンの外で倒れたアイズを見付けたんだ」

「なんやアイズたん自力で外まで戻つてきとつたんか。流石ウチのアイズたんや！」

期待の新人なんやけどちよいちよい無茶するんがたまにキズやんな。リヴエリアママも心配しとるしホンマに無茶はアカンよ？」

「それがどうも自力で戻つてこれた訳じや無さそうなんだ。あまり怪我はなかつたしポーションも残つてた。剣もまだ折れてなかつたからいつものアイズならまだ潜つてた可能性が高いんだ」

「上層とはいえ体力切れの状態で殆ど傷を負わずに帰つてくるのはレベル1ではちいと考え難いしの」

ならなんや？外まで運んだ誰かが居るんか？

レベル1とはいえアイズは結構有名な冒険者やしロキ・ファミリアの紋章もあるんやから恩を売る意味も含めて何かしら連絡があつてもおかしない筈や

剣もポーションも取られとらんから物取りの線はないやろうし親切心にしては中途半端や

何が目的なんかまつたく分からんわ

「まあ、それは今はええわ。他に何を見たんや? 何かあつたんやろ? それ以外に気に入ることが」

「ああ、ここからが本題だからね。アイズの近くにあつたんだよ……ダンジョンから往復している獣の足跡がね」

「しかもありやあかなりの巨体じや。足跡の幅を見るに全長だけでも3 Mは超える<sup>メルド</sup>じゃろう」

「にわかには信じがたいけど状況から見てもアイズを運んできたのはこのモンスターだろうね」

は?

ダンジョンから往復しとる獣の足跡?

モンスターがダンジョンから出てきた言うんか?  
いや、そもそも上層で3Mを超える巨体のモンスターやなんて聞いたことないわ  
しかも人を助けてそのまま外まで送り届ける?  
なんやそれ

ホンマにソイツ普通のモンスターなんか?

アカン、イレギュラー過ぎて意味が分からんわ

「ギルドやガネーシャのどこにも話通しとかなアカンし、これ以上は明日、アイズたんが  
起きてから詳しく聞いてからでもええやろ」

翌日、アイズたんに話を聞いたんやけど

益々わけ分からんようなつてきたわ

曰く、アイズたんの3倍近い大きさの白狼だつた

曰く、攻撃が当たらないけど反撃もしてこない

曰く、他のモンスターを蹴散らしていた

曰く、何度か上から襲いかかってくるダンジョンリザードから助けられた

曰く、アイズたんが体力切れになるまで振り切ることなく攻撃を避けて逃げ続けた

なんやその構つてちやんな犬は!?

ホンマに狼か!?

取り敢えずイレギュラーな新種なんやし

襲われんなら色々調べといたろ

アイズたんが世話んなつたようやしな

## 6話 私！アイズ！奇妙な関係？

私は狼である  
名前は未だない

あの凍えるような冷たい風から逃げた翌々日また童が私の元へとやつて來た  
どうやら緑色のお姉さんはいないみたいだけど今日は前から來ていたおっさんが一  
緒だった

その日からも毎日の様に童とおっさんが一緒に私の元へと來ては私が逃げて童が追  
いかける日々が続いた

そんなある日、初めておっさんが私に話し掛けてきた

「お前さん毎日毎日追い回されて嫌にならんのか？」

私は驚いた

いつも私から童を守れる位置に陣取り付かず離れずな感じで見守り続ける喋らないおっさんかと思つたら話し掛けてくるものだから本当に驚いた

そして質問の意味が分からない

言葉は何故か分かるから意味も分かるけど嫌になる？

何で？

我ただ遊んでるだけなんだけど？

首を傾げている私と何故か一緒に首を傾げている童を見ておっさんは笑い出す

「凶悪な面でとぼけた顔しおつてからに本当に可笑しな犬つころじやわい」

「ワオッ！」

「おお、すまんすまん。犬ではなく狼じやつたな」

？

流石に犬ではないと抗議の意味で吠えると訂正してくれたけどまた笑われた。何で

この後、おっさんと少し話し（私は首振るだけ）待ちきれなかつた童が襲い掛かつて  
きていつも通りの鬼ごっこになつた

その日からおっさんは来る度に何かしら話し掛けてくるようになつた。殆ど質問だ  
けど

やれ何処から来ただの

やれ同族はいるのかだの

やれ人と敵対する気はあるかだの

良く分からぬけどそんな感じで色々と聞かれた

その過程で外の話も色々と聞けたから良いかな  
良いのかな？

何でも外では1000年くらい前に何人も神様とかいう胡散臭いのが天界とかいう  
場所から降りてきて人間に恩恵とかいう加護を与えてファミリアとかいう派閥を作つ

て いるらしい

新手の宗教か何か？

ガレス（おっさん）とアイズ（童）は同じ派閥に所属していてダンジョンにはアイズのレベルを上げに来たらいいけど何で私にこんな話をしてるんだろ？  
というかレベルつて概念あつたんだ

まあ、こんなどうでも良い話はおいといて

有益な情報としては私の所にはあまり他の人間が近付かないように手配してくれたらしい。初めて見付かった稀少なモンスターだから倒さずに調べたいって事らしいけど稀少じやくなくなつたら殺されるのかな？それは嫌だなあ

そんな素振りがあつたら下に逃げれば良いか  
多分、下の霧の中なら撒けるだろうから

最悪の場合はあのモンスターの出なかつた階より下に強行突破していけば良いよね

そうならないことを心の何処かで祈りながら私は今日もアイズと鬼ごっこを続ける

## 7話 何これ? ドラゴン! 嫌な気配!

私は狼である  
名前は未だない

最近、アイズの様子が変な気がする  
私を追いかけてくる頻度も減っているけどダンジョンには来ているみたい

アイズが私の所に来なくなつた

代わりにならぬかアイズやガレスの匂いが付いた人間、多分同じ派閥の人間なのだろう  
けどその人間が私を見に来るようになつた  
正直鬱陶しい

私に用がないのなら来ないでもらいたいくらいなのだけど何故かアイズが来なくなつて毎日その人間がただ様子を見に来る

私はそれを無視する

私に用がないなら私もソイツに用はない

最近はこの辺りのモンスターも私に手を出さなくなつてきただからアイズが来なければ私にやることはない

体の動きが鈍くならないようにこの部屋を走るか寝ているか餌（モンスターの中にいる石）を取りに行くくらいだ

誰か追いかけてくれないかな……

久し振りに階層の移動をしてみた

別に来てくれないアイズを探してゐるわけじゃない……ないつたらない

私のいた階層が確か9階層だったはずだから2つ降りて今は11階層である。霧が鬱陶しいけど大体の地形は把握してゐるから問題はない

ただ背中に乗つてこようとする空飛ぶ小鬼がムカつく

11階層に降りて何日経つたのかな？

アイズが来ないから1日事の終わりがまた分からなくなつてしまつたけど寝た回数

で数えたら4回寝た

今日はダンジョンの様子が変だ

具体的には分からぬけど感覚で変だと分かる

その時だ

おかしな匂いを私は感じた

なんだこの匂いは

人間じゃない

モンスターでもない

亜人でも獣人でもない

無性に殺したくなる臭いその近くに良く知る匂いがあつた

駆け出した

何がいるのかは分からぬけどソレの近くにアイズがいる!

地面が揺れている

ダンジョンから憎悪の感情が溢れてる……ような気がする

これもきっとムカつく臭いのせいだ

急がなきや！

「ワオオオオオオン」

私は咆哮する

届いたのかは分からぬけどこれは警告だ  
アイズが肉体的にだろうと精神的にだろうと私と遊べない状態になつて いたならお前を殺すという警告だ

臭いを便りに辿り着いた場所は入り口が岩石に塞がれたルームだつた

これはあの臭いの奴に反応したダンジョンの仕業なのだろう逃がさないために道を塞いだのだろうが余計なことをしてくれたものだ

私は全力で岩石に体当たりをしぶち抜く

開けた視界に広がるのはボロボロのアイズとそれを仕留めようとする翼を持つ漆黒の鱗のトカゲというよりは竜だろうものと焼けた大地だつた

その大地を私はぶち抜いた勢いのまま駆け抜けアイズを回収し背にのせると翼竜を睨み威嚇する

「ガルルゥウ」

ああ、赦せない

私の遊び相手をよくもいたぶつてくれた

心臓が

肉体が

牙が

爪が

応じるのだ

これは応報だ

絶対的な応報だ

奴は私から奪おうとしたのだから

だから私も奪おう

奴の全てを奪い尽くそう

背にアイズを乗せたまま私は駆け出す

地を踏みしめ

風を切り

壁を走る

先ずは翼竜を地に落とすのだ

透明化を連続的に使い感覚を狂わせる

そうすると翼竜は直ぐに私を見失つた

見失つたのならば後は背後で跳躍し翼竜を地面に捩じ伏せるのみ

さあ、何から奪おうか

やはり翼からだろう

私に踏みつけられ地に伏せるしかない奴の片翼を食い千切れれば翼竜いや、竜は喚き暴

れ逃げようとするけど逃がしはしないすかさずもう片方の翼も食い千切ろうとした時  
だつた

「待つて……お願い」

それは背中に乗せたアイズ制止の声だつた

何故止める

伝わるかは分からぬがそう目で訪ねる

「私がやる……私に倒させて……」

伝わつたらしい

自分で倒したいと言うなら良いだろう

これは元々私の復讐ではないのだから

彼女が自分で復讐を果たしたいと言うのなら私はそれを尊重しよう

奪われる前に奴を潰してしまえば良い

私は竜から足を離し少し距離を取るとアイズを背中から下ろした  
その間に竜も起き上がり体制を整えたようだ

常に竜の側面や背面に回るよう疾駆しながら戦いを優位にしようと立ち回るアイズ  
に負けじと竜も牙や残つた翼での翼撃で打ち払おうとする

アイズの一閃ごとに鱗割れ弾け飛ぶ鱗の破片、どちらのかも分からぬ鮮血の欠片

しかしその状況も直ぐに崩れた

翼を狙いアイズが飛び掛かった直後に風を切る勢いで竜が体躯を旋回させ鱗に包まれた尾がアイズもろとも辺り一面を凧ぎ払つた

「あっつ!?

振るわれた尾はアイズの胸元に叩き込まれ私の元へと吹き飛んで來た

強烈な一撃だったのだろう

アイズの鎧はひしやげてしまいもう修理することも出来ないだろう、剣も鱗が入つた

ようだ。

これ以上はもう無理だろう  
血の混ざった唾液を吐き出し痙攣しもがくアイズを見て私はそう思い代わろうと足  
を踏み出した瞬間、周りを炎の渦が囲んだ

### 竜の息吹

どういう原理かは知らないけど息吹で私とアイズを炎の壁の中に閉じ込め一網打尽  
にするつもりなのだろう

やつてくれたものだ

早々に始末してしまおう

私の毛が焼けて変色してしまわないうちに殺してしまおう

私を狙った時点でこれは私の応報なのだから

竜は此方が動けないとthoughtのか特大の息吹を放とうと溜めの体制に入つたようだ  
溜めが終わる前に終わらせよう

そう思い踏み出そうとした瞬間私が来た入り口とは別の入り口の岩石が吹き飛んだ  
見てみればいつぞやの緑のお姉さんがいた  
おそらくアイズを探しに来たのだろう

緑のお姉さんは状況を見ると声を張り上げた

「アイズ！ 言えつ、呼ぶんだ!! 『目覚めよ』<sup>テンペスト</sup>と！」

緑のお姉さんに気を取られた隙に溜めが終わり私たちに向け放たれた炎  
しかしアイズの目にもまだ光がある

アイズは諦めていないのなら、まだアイズに任せても良いだろう

「『目覚めよ』!!」

次の瞬間巻き起こる大爆発

しかし私たちの周りには風の壁に守られ被害は一切なかつた  
私の足元で地に膝をつき立ち上がる意思を見せせるアイズは風の鎧を纏いその目から

どのような思いからか私には分からなければ涙を流していた

「お母さんの……風。……ずっと……一緒に……！」

立ち上がるアイズに呼応するかのように勢いを増す風に竜は恐怖するかのように一歩後ずさる

それを認められないかのように首を振り再度溜めの体制へと入った

しかしその好機を今のアイズは逃さなかつた

疾駆

風の鎧の力なのか今までの比に成らないほどの加速力で竜の元へ掛けるアイズは颶風の矢となつた

この時その加速により竜はアイズを見失い溜めに入つていた竜は移動することもできず防御も回避も迎撃する術すらなかつた

「うああああああああああああああ！」

アイズは咆哮する

その両手に握られた剣を風が包み込む

涙を散らしながら振り上げられた剣を包む風は既に竜巻と呼んで差し支えないほどに吹き荒れていた

零となつた間合い

溜めが終わり広範囲に放たれる息吹

それと同時に振り下ろされる暴風を宿した剣

『母の風よ』<sup>エアリエル</sup>!!

解き放たれた暴風は竜の頭部を粉碎し息吹による火炎の濁流が大爆発を引き起こした

爆風により空中へと投げ出されたアイズを私は回収しその身を背の上で寝かせた

「……お母さん……お父さん……あり……がとう」

未だ体を包み込む風と剣を抱きアイズは私の背の上で涙を流していた  
今の私に母や父は存在していないし、生前の記憶も殆どが抜け落ちたがきつとアイズ  
には大切なもののだろう

今暫くはそつとしておくとしよう

私はその場で身を屈め只々じつとすることとした

## 8話 私・ファミリア・神様登場？

あれから緑のお姉さんが駆け寄つてきて何故か私の上で抱き合つては泣き合つて序でに二人揃つて眠つてしまつた為、再び地上に向けて歩みを進めていた

私も人間から見たらモンスターであるはずなのに何故こうも安心しきつて寝て行われるのかな？

というかこの緑のお姉さん、確かにアイズはリヴエリアって呼んでたっけ？

前に私に魔法だっけ？なんかそんな感じでの攻撃してきたよね？アレなの？アイズに反撃しないから人間全てに対して安全的な感じにとらえられてるの？

まあ、アイズが遊んでくれなくなるだろうからしないけど結構恨んでるよ？起きたら謝つてよ？

そんな事を考えていたら直ぐに地上への入り口に辿り着いた

何故かガレスとかちびっこい男とか結構な人数の人間達がスタンバつてた  
え?ナニこれ?待ち伏せされた?

私は狼である  
名前は未だない

わざわざアイズとリヴエリアを地上に届けに行つた私は何故か地上のどつかの建物  
の庭で檻に入つてた

切に思う……………何で?

結局この派閥の人間達はあの夜に色々とあつたらしく私についての対応が行われたのは翌日の朝になつてからだつた

起きたら知らない人間が沢山いてビックリした

ビックリしすぎて気付かれずに寝た振りも出来なかつたよ

取り敢えず寝た振りが出来ないみたいだから起き上がつてみたら人間達の中から一人だけ匂いの違う——昨日のムカつく臭いに近い気がするけどアイツ程ムカつかないし何か違うそんな奴が出て来ていきなり胡散臭い口調で言うことを聞くなら此処に置いてやる的なことを言つてきたんだけどダンジョンに帰っちゃ駄目なのかな？

喋り方胡散臭いし初めて会つた奴の言うことを聞くのとかも嫌だしこの檻くらいなら壊せるし逃げちゃおうかと思つて無視を決め込んでいたら知つてる匂いが近付いてくるのに気がついた

「口キ……」

「お、アイズたん！ 目え覚めたんか」

アイズだ

後ろの方にガレスやリヴエリア、名前の知らないいちびつこい男がいるから多分一緒に来たんだろう

「あ、そや！ウチの言うことは聞かんでもアイズたんの言うこと聞くんやつたら此処に置いといたるわ！それならどうや？いつでもアイズたんと遊べるで？」  
「口キ？…………」

アイズといつでも遊べる！？

ダンジョンで来るかも分からぬ日々を過ごさなくても良いというなら此処に――  
――何処かは知らないけど住んでも良いのかも知れない

何より地上の世界を私は知らない

ダンジョンの中じや満足に寝れないことも多かつたし此処にいる人間は今のところ危険な強さの気配を持つてるのも数えるくらいにしか感じないから何が起こるか分からぬダンジョンよりは安全かも

「…………この子が此処に住むの？」

「ウチはアイズたんがしつかり世話をするんやつたら飼つてもええと思つとるよ。後はコイツ次第や」

何故だろう

今、ペット扱いされたんだけど

私が世話をされるの？

いやいや、私がアイズの子守りをするの間違いでしょ？

アイズはアイズで何故かキラキラした目で私の事見てる、もしかして期待してるの？  
え？ ナニこれ？

これ断つたらアイズ悲しむんじやないかな？

そう思うと私は断るに断れず結局ここ

ロキ・ファミリア、正確にはロキ・ファミリア所属のアイズに世話になることになつたのだつた

取り敢えずこの日出されたご飯は美味しいかつた

9話 私・名前・くじ引き?

私は狼である  
名前は未だない

ダンジョンを彷徨い  
幾星霜

私はアイズという人間に追いかけ回されそこに楽しみを見いだし気がつけばペツトの様な地位に就き口キ・ファミリアなる派閥に所属することになった

今一度問おう——何故？

それはそうとご飯である

この派閥は食事は揃つて行うという主神——口キの拘り?によつて食堂で、派閥全員が集まつてとるらしい

そしてそれに習い私も食堂へと連行された

背中には飼い主?たるアイズが乗つている

何故かつてお願いされたからだよ?

「背中に乗せて……お願い」

なんて期待の籠つた目で見られたら断れなかつた

私は期待の籠つた目に弱いらしい

ところで目的地に着いたんだから降りる気ないのかな?

毛に食べ物を溢さないでくれるなら別に乗つてるのは構わないんだけどリヴァエリアやガレスの微笑ましそうな視線や口キから感じる怨念じみた視線が痛いよ

因みに私、結構団体が大きかつた筈なのだけど何故か縮む事の出来る能力があつたらしい

今まで必要ななかつたから気づかなかつたけど屋敷の扉とか人間用だから小さくて通れないかと思つたら何か出来た

それでも大きいのは変わらないのだけどね

頭の高さが大きめの人間と変わらないくらいの位置までしか縮めなかつた

私は何故かアイズの椅子代わりに成つていたけどちゃんとご飯は貰えたからどうでも良い

アイズは軽いし

ご飯は凄く美味しかつたよ?

今まで石しか食べてこなかつたから余計に美味しく感じたのかもしれないけど本当に美味しかつた

これから毎日コレが食べられるのなら私はこの好奇の視線や刺すような嫉妬心たつぶりな視線にも耐えて見せよう

お風呂である

ここの主神は風呂も無駄に広く作っているらしく体の大きい私でも入ることができた

何故か私の体を洗いたがつたアイズやリヴィエリアに連れられ、付いてきた何人かの名前の中知らない女性も一緒になつて私の体を洗剤で泡だらけにされた

動くと怒られるから寝そべってるのだけど凄いねこの世界の洗剤！水浴びや擦るだけじや取れなかつた汚れが一回で余すこと無く取れてくんだもの！

泡が黒くなつてピックリしたよ

泡が流されて若干蒼みのある白毛が現れた様にはもう感動なのだよ

そしてお風呂から出るとなんとドライヤーまで存在していたのだから余計にピックリした。何を動力に動いてるんだろう？

ああ、神よ

アイズを苛めたりあんなムカつく臭いのする奴は嫌いだけど感謝するよ。口キを少

しくらいなら認めても良いのかもしない

また所変わつて食堂である

私たちがお風呂に入つてる間、ロキが何やら眷属達に書かせていたらしく戻つてきた  
アイズやリヴィエリア達にも羊皮紙を渡して何かを書かせていた

その際、名前がどうとか、じやが何とかって聞こえたのだけどなんの事なんだろう？

「よつしゃ！ 皆投票し終わつた様やな！ ホンならくじ引きを始めんでえ！ 題して！ アイズたんのペツトの名前投票会や！」

『イエー!!』

ちよつと待つて！ アイズのペツトつて私の事だよね！？ 名前！？ そんなの聞いてないん  
だけど！

私の動搖やらなんやはお構い無しにロキは内容を説明していく

どうやら集めていたあの羊皮紙は私の名前の候補を書いたものでその中からくじ引きの様な感じで名前を決めるらしいが飼い主？ たるアイズが嫌がれば却下となるらし

いから私はアイズのセンスに期待するしか無さそうである

「先ず一つ目や！なになに……トンヌラ……誰や！こんな書いたんわ！アカン！コレは色んな意味でアカンで！次や次！」

アイズが反対する前に口キの猛反対が起き強制的に次のくじを引くことにした  
アイズも無言で頷いてるからアイズ的にも無しみたいで私は安心した本当に良かつた

「次はもうちよいまともなんやろな……サトチー……次や！ もよもと………アンタらホンマにこれで行く気やったんか？ 誰か冗談やゆうてや」

引かれるくじは大体こんな感じのばかりで私もアイズもそして口キも反対をし続け  
流石に自分の眷属達のセンスのなさに嘆きにも似た表情を浮かべていた

「次行くで……今度こそホンマに頼むで！……なんやコレ？ 二つ名も書いとるんか？『狼王ロボ』か。今までのよりはかなりセンスある名前やないか。アイズたんはどうや

?ウチはこれでもええと思うんやけど

「……良いと思う……どう?」

私にも確認してくる辺りアイズは良い子だと思う  
だから私の答えも決まつてるよ

私は狼である

名前は狼王ロボである!

私は今、此処にロボとして生まれた!

## 第1・5章

### 10話 私のオラリオ生活？未知との出会い

私は狼である

名前は狼王ロボである！

名前を付けられ益々アイズのペツト感が出てきてしまった私なのだけど首輪代わり  
なのか道化の紋章の刺繡をされた青いスカーフを首に巻かれアイズを背中に乗せたま  
ま何故か一緒に檻に入れられこれまた何故かロキ+数名の眷属に囲まれ街中を引かれ  
ていた

檻には大きな布が掛けられて周りの景色は一切見えないけど色々な匂いは漂つてく  
る

いたるところから人間とは少し違う匂いも感じるから多分ロキと同じ神とかいう奴  
等なのだろう

喧騒とした街中とはいえ薄暗い檻の中にいれば台車の揺れさえも眠気を誘う。といふか既にアイズが私の背中の上で寝ている

アイズといえばあれからずつと背中に乗つては毛を撫でたり抱き付いてたりと色々やつてきて妙に懐かれたというより私の毛並みが気に入つたらしい

気に入つてくれるのは別に構わないどころか自慢の毛並みなわけだからある意味では大歓迎なのだけれどお願ひだから涎とか垂らさないでね？おねしょとか絶対にやめてね？

それにしても私は何処へ連れて行かれるのだろうか？正直、不安でしようがないのだけど寝てたら終わつた後とかあるかな？考えるのも面倒だしあう寝ても良いかな？アイズも寝てるし良いよね？よし寝よう！

目を覚ました私は何処かもよく分からぬ階段のような段差のついた壁に囲まれてはいるものの広い空間の真ん中で檻に入っていた

アイズは何処に行つたんだろう？

何で私、起こされずに一人放置なの？

誰もいないならまた寝ちゃうよ？

寝ちゃつても良いんだね？

じゃあおやすみなさ――

「俺が、ガネーシャだ！」

私の安眠は突如響いた声に妨害された

「俺が、ガネーシャだ！」

何故か再び大声で名乗る神の匂いを漂わせる謎のポーズをとる暑苦しい大男がいつの間にか壁の中程の段差にいた

うん、見なかつたことにしよう  
おやすみなさい

「俺が！ガネーシヤだあ！」

「俺が！ガネーシヤだあ!!」

「俺が!!ガネーシヤだあ!!」

「俺があ!?ガネーシヤだあ  
!?!?!

何回目の名乗りだろう

名乗る度に少しづつ近付いてきて声も少しづつ大きくなつてきているけど私は負け  
ないよ！私が無視できなくなるか大男が諦めるか根比べだ！

そう思つてたんだけど何処に行つてたのか口キの匂いが近付いてきたから伏せてた顔を上げることにした

「なあ、口ボ。そろそろガネーシャがうつさいんよ。反応したつてや。帰りに旨いもの買うたるから、な？」

美味しいものの為なら仕方がない！

反応してあげよう！

「私が！ 口ボである！  
ワオ——ン！」

「うむ！俺が、ガネーシャだ！」

「私が！ 口ボである！  
ワオ——ン！」

「うつさいわ！ボケ！」

「……口ボ、うるさい」

反応してつて言うから返事してあげただけなのに何で私も怒られるの?  
いつの間にかいたアイズにも怒られてしまった  
何で?

# 11話 運命の出会い

私は狼である  
名前は狼王ロボである！

暑苦しい上にしつこいおつさんことガネーシヤに付き合つて名乗り合いをしていたら何故かロキとアイズに怒られてしまつた私はやることも特に無いしふて寝をすることにした

別に怒られて拗ねている訳じやない

目的も聞かされずいきなり暑苦しいおつさんの元へと運ばれ無視したらエンドレスな名乗りを聞かされ答えたら何故か怒られて結局なにしに此処に運ばれたのか分からぬし何も聞かされてないからきっとおつさんと顔を会わせるだけだったのだから私は放置されて神同士の話し合いになつているのだろう

つまり私の役目は終わつたのだから寝るだけである  
決して拗ねて寝ようとしている訳じやない！

「ロボ?.....寝ちゃダメ」

「ワウ?」

寝てはいけないらしい.....何で?

私の役目は終わつたはずなのだけどアイズ的にはまだ終わつていないうらしい

「寝るのはダメ.....走るなら良い」

アイズも暇だつたらしい

檻を開けてくれて追い掛けつこのお誘いが来た

流石に檻を壊しちゃうのは悪いかなあと思つていたから開けてくれたのなら出よう  
じやないか!

走ろうじやないか!

さあ!位置について.....ヨーイ.....ドーン!

今日も始まりました私とアイズの追い掛けっこ  
鬼は勿論アイズである

ダンジョンでアイズと良く追い掛けっこしていた広場に負けず劣らずの大きな空間  
の中を大地を踏み締め風を切り駆け回る

『目覚めよ』！……ロボ、覚悟！』

「ワウ！」

力のある言葉と共にアイズが風を纏い疾駆する

何だかんだで風を纏つたアイズとの追い掛けっこは初めてでその加速力には驚いた  
驚きすぎて危うく尻尾を切られかけた

毛先はちよつと切られた……私の毛が  
しょんぼりである

そこからは速度を上げフェイントを入れ時折姿を消して少しレベルの上がった追い  
掛けっこは暫く続いた

「そんで自分等、コレドないするんや？ん？」

「えつと……その…………めんなさい」

「ワウう…………クウウン」

怒られました

ついつい熱中し過ぎて気がつけば私の入っていた檻が粉々に砕けていた  
周りを見てみれば壁には罅や穴があき地面は凹凸に  
はい、悪かつたとは思つてますよ

ごめんなさい

私はその場に伏せて謝罪の姿勢を見せるのであつた

「ロボの事で何か困ったことがあれば我がガネーシャ・ファミリアがいつでも力を貸そ  
う！何故ならば、ロボは既にこれ俺、群衆の神の友達だからだ！そう、俺が！ガネーシャ

だ！」

「なんかあつた時はよろしく頼むで」

「ありがとうございます」

「ワウ！」

知らないうちに私とガネーシャは友達になつていたらしい  
暑苦しくてしつこくて変なポージングさえしなければ普通に良い神様っぽいから別  
に構わないけど言わせて欲しい…………何故？

とりあえず私たちは帰ることにした

檻は私とアイズが壊したから私が台車を牽くことになった

ロキと眷属を乗せて台車に乗せ背にはアイズが乗り馬車ならぬ狼車である

ガネーシャ・ファミリアに見送られ周囲から人間たちによる視線を浴び私はロキ・  
ファミリアの館に向かつて狼車を牽く

暫くするとアイズから制止の声がかかつた

「…………」れ、ロボにも…………ジャガ丸くん」

近くにあつた屋台で買い物をしたアイズは戻つてくるなり私に買つてきた『ジャガ丸くん』なる物を差し出してきた

匂いは悪くない……むしろ良い匂いだ

そして口に含めば外はサクサクの衣、中からホクホクの芋と刻んだ野菜の味が広がる美味である…………恐ろしく美味である！

「ワオオオオオオオン！」

私は今日、『ジャガ丸くん』と運命の出会いを果たしたのだつた

## 12話 口ボの怒り、応報の刻

私は狼である  
名前は狼王口ボである！

あれから数ヶ月、毎日のようにアイズと追い掛けっこを続けた時折他の眷属達も参加しては疲れはてるまで館の広場やオラリオの人通りの少ない道、ダンジョンの中を走り続けた

空いた時間にはアイズを背に乗せて街中を歩き回りジャガ丸くんを食べたり子供達を背に乗せたりして遊んだりと結構充実した日々を私は過ごしていた

そんなある日、何故か私を指名で口キから荷物運びを頼まれた  
完全に馬車のような扱いである

「ガネーシャの所とディアンケヒトの所、それとギルドに届けるんやで。あと、帰りにコレでジャガ丸くんをアイズの分も買つてきいや」

「ワン！」

ロキがスカーフの下に隠した巾着にヴァリスを入れてくれる。なにやら台車に大量の荷物が乗つてるけどジャガ丸くんを買ってきて良いなら別に良いでしよう

さあ！いざ行かん！

私は台車を牽き街中を荷が崩れないようにゆっくりと歩き出しのであつた

「ワン！」

「……ロボさんですか。今日は荷運びですか？」

先ずはディアンケヒト・ファミリアの店の前で一吠えすると中から腰まで伸ばした銀色の髪の女性が出てきた

彼女はディアンケヒト・ファミリアの眷属であるアミツド・テアサナーレ  
若いながらもこうやつて店番や私が来たときの相手なども任せている次期団長で  
はないかとの噂も聞いている程の逸材である

「確かに受け取りました……ロボさん、コレをどうぞ」

此処で卸す荷を台車から下ろしたアミツドは私の前まで来ると私に干し肉をくれた  
美味である

なんか抱き締められたり撫で回されたりして干し肉が美味だから気にしない  
なんかアミツドの目がキラキラしてるけど私は気にしない

「では、またいつでも来てください」

そうして干し肉を食べ終わつた私はガネーシャ・ファミリア、そしてギルドで荷を卸  
しては個人的……いや、個狼的に食べ物を貰い撫で回されては軽くなつた台車を牽き既  
に馴染みのジャガ丸くんの屋台へと足を向けた

「ワン！」

「あらロボちゃん、今日も来たんだねえ。今日は何にするんだい？」

屋台にはいつものおばちゃんがジャガ丸くんを売っている

私は屋台のメニュー板を叩くことでジャガ丸くんを購入している

今回はプレーンを2回、そして最近ハマつている小豆クリーム味と抹茶クリーム味を

4回ずつ叩いた

計10個のジャガ丸くんを買うことにした

お代はおばちゃんがスカーフ裏の巾着からその分の代金を持つていつてくれるから  
私はジャガ丸くんの袋を受けとるだけだ

「ロボちゃん、いつもありがとうね」

買ったジャガ丸くんの袋を咥え館へと帰路を辿る

ああ、咥えた袋から香るジャガ丸くんの匂い

これも購入後の楽しみだと私は思うんだよね

冷めないうちに帰つて早くアイズと分けるとしよう！

うきうき気分で歩いていると不快な匂いが漂ってきた  
出来れば嗅ぎたくない人間の血の匂いだ

そして私はこの血の匂いを良く知つている

それはアイズの血の匂いだつた

濃い血の匂いだ  
流れたばかりの血の匂い

軽傷で匂うような濃さじやない

私は全力で駆け出した

台車なんて知らない

周りの破損なんて知らない

そんなものより私のものに手を出すような奴に怒りの鉄槌を

見付けた

私の目に映るボロボロのアイズと醜いデブだ

ああ、殺そう

惨たらしく、凄惨に、徹底的に殺そう

「……ロ……ボ……」

微かに聞こえた私を呼ぶアイズの声に私の理性は蒸発した

心臓が

肉体が

牙が

爪が

応じるのだ

これは応報だ

絶対的な応報だ

奴は私から奪おうとしたのだから

だから私も奪おう

奴の全てを奪い尽くそう

ドロドロとした感情が私を包み込む

意識に靄が掛かつて奴が何か喚いているけど私には既に認識できない

さあ、  
応報の時間だ  
  
白かつた毛に徐々に青みが増し足元から黒い影が沸き上がる

# 13話 オラリオの復讐者

足元から沸き上がった黒い影がロボの体を上り背の辺りで姿を変えていく。出来上がるのは四枚二対の影の刃

白かつた毛並みは冷たき憎悪に染まるかのように蒼白く毛先は黒くすら成りはじめ  
る

しかし口に咥えたジャガ丸くんの袋があるせいでみためかなりシユールである。  
シユールではあるが袋から漂うジャガ丸くんの匂いが唯一、現状でロボの動きを留まら  
せている物でもあつた

傷付き自力で立つことすら難しいアイズを目にし自身を呼ぶアイズの声を聞き既に  
大半の理性は蒸発した

残った理性で押さえ込んでいる衝動をロボは自ら解き放つ、我慢する理由など無いの  
だから。ロボはジャガ丸くんをアイズの近くにそつと落とす

その瞬間、ロボから押さえ込んでいた衝動が溢れるかのように目口から燃え上がる憎悪を表すかのように蒼白い炎が溢れる

彼の者は止まらないだろう

何故ならば彼の者は狼王だから

狼王は群れを守る為に戦う

群れを害するものは全て敵だ

ロボにとつてアイズは既に自らの群れの一人だつた

ならば害するものを——件の醜き者を排除しよう

相手の言い分など知りはしない

聞く必要すら有りはしない

ならば排除しよう

件の醜き者は動かない

ロボを侮っているのか、それとも蛇に睨まれた蛙なのか

「グルアア!!」  
「ゴファツ!?」

咆哮と共にロボの姿は搔き消え次の瞬間には醜き者の眼前へと迫り上空へと打ち上げられていた

「グルオオ!!」

影の刃が蠢き中に浮いた敵へと狙いを定め放たれる

空中にいる敵は余程の人外か魔法やスキルがなければ避けることは不可能な刃は刺すことも切ることもなく敵を滅多打ちにする

長く苦しめるための殺傷力の低い攻撃をロボは敢えて行っていた。直ぐには殺さないと、気が済むまで嬲るかのように打撃でも致命傷に成りうる箇所は徹底的に避け影を打ち込む

「口ボ！止めて！」

背後から掛けられた聞き覚えのある声による制止を受け影の動きが止まる。醜き者はそのまま落下しまだ意識を保っていたのか這つて行つた。

ロボが振り向くと、ボロボロだつたはずのアイズが無傷で立つていた。近くにはフインとリヴエリアがいる、転がつた瓶から考えてハイポーションかエリクサーを使ったのだろう。

「……口ボ……ありがとう……もう良いよ。帰ろう？……一緒にジャガ丸くん食べよ？」

アイズがロボに近付き頭を、首を撫でながら語りかけてくる

怒りが霧散するかのように炎が消え影が薄れていき毛並みも白く戻っていく

殺され掛けていたのはアイズ自身だ。そのアイズがもう良いと言つたのだから良いのだろう。

今は無傷でいるのだから私は何も奪われていない  
奪われていらないならこれ以上は必要ないだろう

幼いアイズの目の前で人の死を見せるのも気が進むものではないのだから  
もう、帰ろう

疲労しているであろうアイズを背に乗せ私は帰路についた

私は狼王である  
名前はロボである

## 第2章

### 14話 ロボと冒険者依頼

私は狼である

名前は狼王ロボである！

私がロキ・ファミリアに身を寄せて8年の月日がながれた。あれから醜き者、フリュネが2度アイズに突つ掛かってきたがどちらも私が手を出す必要がないほどアイズは強くなつた。3度目では返り討ちにするくらいである

ただ最近のアイズは5年ほど前に加入した姉妹のアマゾネスの影響なのか戦闘狂になつてきていて私としては心配である

心配ではあるけどアイズにばかり気を付けておけるほど私にも余裕があるわけではない

何故なら私自身が現在戦闘中だからである

私とロキ・ファミリアの面々は迷宮遠征とやらでダンジョンの中へと潜り59階層を目指すついでにディアンケヒト・ファミリアから依頼された51階層にあるという『力ドモスの泉水』とやらを採取する事になりモンスターの生まれないという50階層にキャンプを作り少數精銳のパーティを2つ作り依頼された量を確保しようと2手に分かれることになつたのだが

1班にレベル5で姉妹のアマゾネス、ティオネとティオナ、3年前にレベル5になつたアイズ、そして同じく3年前に加入したレベル3のエルフ、レフィィーヤ、そして私の4人+1匹

2班にレベル6で団長のフイン、同じくレベル6の古参幹部のガレス、6年前に別のファミリアから改宗したレベル5で狼人族のベート、8年前に加入したレベル3のラウルの4人

1班の編成に關してフインからは班が決まつた後に「ロボ、大変だとは思うけど4人を頼んだよ。君だけが頼りだ」と言われるほどに心配な編成である

そんな一行の後ろをついて行き目的地に着いた私達が目にしたのはへし折られ、押し潰された木々の残骸と鱗割れた地面と壁から粉々になり散らばつた破片

そして何よりも目を引いたのはルーム内のいたるところに溶かされたような跡だった

溶け欠けの樹木からは今も黒煙と共に私の鼻を潰す為であるかのように異臭が漂つていた

正直、今すぐにルームから出て離れたい

「くっさ……ロボ、無理しなくていいからね」

ティオナが顔をしかめながら鼻元を腕で覆い私の心配をしてくれた  
何気に優しい子である

困惑の表情を浮かべるアイズ達と共にルームの奥へと進むと破壊しつくされた光景の中にそこだけは聖域のように守られた空間があつた

美しい蒼色の水面を揺らす泉だ

そして泉の前にうず高く積もる灰の山

「これって……」

「……カドモスの、死骸？」

ティオネのこぼした呟きが大きく響き渡った

この莫大な量の灰と静まり返った周囲の状況を照らし合わせれば、まず間違いなくこれがカドモスであつたものだ

「……私達以外のファミリアが、カドモスを倒したんじゃあ……？」

おずおずとレフイーヤが口を開く

真っ先に考えられる意見だがティオネが頭を振つた

「こんな深い階層に来られるパーティーは限られてる。こんな光景を作れるようなファミリアが遠征してるなんて聞いてないわ」

「……それに、ドロップアイテムが回収されていない……」

アイズが灰の中から金色に輝く翼の皮膜の一部を取り出した

この階層の希少なドロップアイテムだ。換金したらそれ相応の莫大な資金が手に入るはずなのにそれを回収しない冒険者はいない  
なら、カドモスを倒したのは冒険者以外のなにか…………モンスターだろうか？

「……ロボ、何か分かる？……」

この異臭の中ではまともに臭いなんてわからないし追うことなんて出来ない。アイズの問い掛けに私は頭を振った。

取り敢えず泉水を依頼の要求量より多く回収し、状況説明のためドロップアイテムと溶け欠け変色した木の一部と一緒にレフィーヤの背負うバツクパツクへと詰め込み来た道を急いで引き返した

引き返しはじめ暫くするとそれが聞こえた

「ああああああああああああああああああああつっ!?」

臓腑の底から引きずり出されたような絶叫が通路に木霊することが重大であると直感させる凄惨な悲鳴。それは聞き覚えのある声だつたアイズ達は顔を見合せ一気に加速し走り出した

「今のはー！」

「ラウル……！」

私が先頭を走り悲鳴の聞こえた方角と匂いを頼りに駆ける

現れるモンスターは鎧袖一触にしつつ走り抜け、通路を幾度も曲がった先にそれは現れた

「なに、あれ!?」

「い、芋虫……つ!？」

ティオナとレフィーヤの声が響く

毒々しい色合いの巨大な芋虫型のモンスターが通路の天井に何度もぶつかり削り落としながらこちらへと迫ってきていた

「団長!?

そして距離を残さずそのモンスターに追走されるフイン達、2班のパーティがそこにいた

# 15話 迷宮混迷

私は狼である

名前は狼王ロボである

私達は今、絶賛全力で逃走中である

あの後、2班パーティーを発見と同時にティオナが芋虫型のモンスターへと斬りかかり、大双刃を胴体へと叩き込むとその傷口から体液が迸り、ティオナの髪の一部と大双刃の片方の剣身を溶かしたのを目撃し私達1班は2班と一緒に撤退を始めたのだった

1班のフィン達はカドモス討伐後、引き返す途中にあのモンスターと遭遇しあのモンスターの群れと出くわしティオナの様に武器を溶かされ逃走をしたそうだ

「群れって、あれ以外にも同じモンスターいるの!?」

「よく見ろっての！あのデケエ奴の後ろにアホみてえに続いてんだろ！」

「うえーつ」

「団長達は、お怪我はありませんか？」

「僕達は問題ない。ただ、ラウルが不味い。あの攻撃の直撃を浴びた」「早く治療してやらんと、こりやいかんぞ！」

ティオネの問いにフインとガレスが切羽詰まつた声をだす

合流後に私の背に乗せたヒューマンの青年、ラウルは両手を力なく垂れ下げ時折、小さな掠れた声も落としている

身に纏う軽装ごと皮膚は溶かされ、更に黒がかつた紫色に変色し今も煙と異臭を放つていた

「フイン、あのモンスターは倒せる？」

「攻撃 자체には効果はある。けど、一撃に対しても一つの武器を犠牲にしてだ。割りに合わな過ぎる」

「……」

「だが魔法ならその限りじゃない。この状況では難しいかもしれないけど、詠唱するだけの時間を何とか稼いで、群れを殲滅できるほどの強力な魔法を撃ち込めたなら……」

フインの分析が終わるや否やその場の全員の視線がある人物、レフイーヤの元へと集まつた

注目されているレフイーヤ本人は良く分かつていなか顔をきよろきよろと左右に振つていた。

「ロボ！ レフイーヤを乗せるんだ！ レフイーヤは魔法の詠唱を！ この局面は君にかかる  
ている、急ぐんだ」

「……分かりました！」

レフイーヤは与えられた役目に大きく頷き、速度を合わせて並走した私の背へと乗つ  
た

ラウルがいるからちよつと狭しそうだけど多分大丈夫だろう

「つ！ 前からも來た！」

前方から押し寄せてくる黄緑の巨体

ティオナの警告と同時にフィンの指示が飛ぶ

「全員、右手の横道に入れ！」

唯一残された通路へと私達は入り込んだ

「よし、このまま通路に引き込んで一網打尽にする。レフイーヤ！」

「誇り高き戦士よ、森の射手隊よ。押し寄せる略奪者を前に弓を取れ。同胞の声に応え、矢を番えよ」

決意を秘めた声が私の上から聞こえる

「帶びよ炎、森の灯火。撃ち放て、妖精の火矢」

透き通るような玉音が進むにつれ、私達の足元、正確にはレフイーヤの足元に展開された魔法円が輝きを増していく

構築される何重もの円に、複雑な体系の紋様  
立ち上がる山吹色の光が通路を照らす

「雨の如く降りそそぎ、蛮族どもを焼き払え」

最後の詠唱文を唱え、魔力が爆発的に強まつた

「撃ちます！」

レフイーヤが叫ぶと同時に私は反転し首を下げレフイーヤの視界を広げる  
目標を捉えたレフイーヤは、杖を構え魔法を行使した

「ヒュゼレイド・ファラーリカ】!!」

夥しい火の雨が連発される

燃え上がる鎌型の魔力弾がモンスター目掛けて殺到し燃焼音と風切り音を轟かせな  
がら敵に突き刺さり炎上する

数百数千にも及ぶ炎矢にモンスター達の絶叫も飲み込まれ瞬く間に炎の海が生まれた

「ほらっ、やつぱり通用するじやん！一発だよ！一発！レフイーヤすごい！」

「ろ、ロボさんがいてくれたので、ありつたけの精神力をつぎ込んでいました……」「景気良すぎんだろ、リヴエリアと言いエルフどもはよお……あんまロボに迷惑掛けんじゃねえぞ」

「よつと、今のうちにラウルの治療をしちまうかの」

ガレスが私の背からラウルを下ろし治療を始めるのをよそに敵を掃討したレフイヤをティオナが誉めちぎる

「……ありがとう、レフイーヤ」

「あ……は、はい！」

すっかり感情の乏しくなった顔をアイズは確かに綻ばせた

向けられた小さな笑みとその言葉にレフイーヤは瞠目し、直ぐに感極まるように相好

を崩した

「……」

「団長? どうしたんですか?」

火の粉が舞い上がる中で押し黙つているフインにティオネが歩み寄る

「この通路に逃げ込む前……危うく撃撃されかけたあの時、モンスター達は前からやつて來た。そしてあの道は、50階層に到達できるルートの筈だ」

「……まさか」

「ただの杞憂ならいいんだけど……そもそも言つてられないか」

虫の知らせを感じていて右の親指を見下ろすフイン  
どうもフインは嫌な予感なんかを感じると右の親指が疼くらしいけど私も嫌な感  
じがしている

きつとまだ何かあるはずだ

「ラウルの治療が済み次第、全速力でキャンプに戻る」

# 16話 復讐者

私は狼である  
名前は狼王ロボである

50階層西端の壁にある大穴がある。ほぼ崖と言つてもいい傾斜面の岩壁が50階層と51階層を繋ぐ通路であり岩壁の至るところに付着する黄緑色の粘液を尻目に私達は駆け上がる

大穴から飛び出すと聞こえてくるのは人の掛け声とけたたましい炸裂音だった

「キヤンプが……！」

灰色の森を駆け抜けながら野営地の方角から上る黒煙に焦燥感を高めながら私達は大樹林を走破した

「リヴエリア、みんな!?」

森を抜けた先には開けた平地と野営地を構えた一枚岩、そして岩に取り繕え芋虫共の群れだった

芋虫共は多脚を岩に張り付けよじ登り、頂上で防衛を行つてゐるリヴエリア達に腐食液を噴出している

崖際で腐食液を防いだ団員達が直ぐ様溶け出す盾を廃棄していく

「矢、放て！」

「これが最後です!?」

「構わん！撃て！」

リヴエリアの号令が聞こえよじ登る芋虫共に向けて数人の弓使いから放たれた矢が命中した芋虫が更に数匹の芋虫を巻き込み地へと叩きつけられていく

「まだあんなに……!?」

「キャンプを包囲されていないのがせめてもの救いか」

芋虫共は知能が低いのだろう、太い列を作り同一方向から一枚岩をよじ登つてゐる。進行箇所が集中しておるおかげで居残り組の団員達はリヴエリアの指揮で拠点の防衛を続けられているようだが、それも時間の問題である

「ガウツ！」

「つ！」

私とアイズが同時に飛び出す

毛に青みが加わり足元から影が沸き上がる

あのフリュネの時からアイズに付き合つてもらい練習を重ねて漸くここまで理性能を飛ばさずに自力で使えるようになった

理性で押さえてるからなのか足から影の鎖が延びてゐるのが不思議である  
使える影も少なく凝縮し

首狩り鎌のような剣の形とし口に咥えている

元が私自身、存在不明の影であるため腐食しない

アイズも魔法で風を纏い芋虫共の列の横つ腹へと奇襲をかけた

「アイズ!? 口ボ!?

一枚岩の上からリヴィエリアの声が聞こえ他の団員達の喜びの声も上がっている

芋虫共の群れに突撃したことにより場の状況は一変した

アイズの武器は不壊属性(デコランダル)と呼ばれるものを付与されてあるため溶かされる心配をせずに芋虫共を駆逐でき傷から噴出する腐食液も風で防いでいるため恐ろしい勢いで芋虫共を斬り殺していく

私も通り際に切り裂き噴出する前に次の敵を切り裂きに跳ぶことで腐食液を浴びずに芋虫共を斬り殺す

一枚岩を目指していた芋虫共も後ろの状況を察したのか反転し数で押し潰そうとござつて襲いかかろうとする

そこへベート達が参戦し、更にレフィーヤの魔法が撃ち込まれれば芋虫共の統制など

あっけなく失われ、あつという間に混線状態へとなる

ティオナ達も一枚岩の上から投げられた予備の武器を使いティオネにいたつては素手で芋虫の魔石を抉りだし全身に腐食液を浴びていながら殺していた  
かなり頑丈に作られたティオナの武器すら直ぐに溶かしてたのになんでまだ戦えてるんだろう？て言うか怖いんですけど……ティオネの事は全部フインに任せよう、そうしよう

私はティオネの事を頭の中から閉め出し次の芋虫を斬り殺す

「週末の前触れよ、白き雪よ。黄昏を前に風を巻け」

芋虫共の殲滅を続けるなカリヴエリア達の折り重なる詠唱が聞こえてきた  
リヴエリアをはじめとするエルフ団員を中心とした魔導士達が一斉砲撃の準備をはじめたようだ

「閉ざされる光、凍てつく大地。吹雪け、三度の厳冬——我が名はアールヴ！」

リヴエリアの詠唱完成を皮切りに私達は戦闘を切り上げ離脱する

「ウイン・ファインブルヴェトル」!!

氷、炎、雷といった多種の攻撃魔法が芋虫共の大群に突き刺さり幾つもの爆発が巻き起こり魔法の残滓が周囲を舞つた

「終わつたー！」

アイズが漏れ残つた最後の芋虫を斬り伏せ私達以外に動くものはいなくなつた

「手こずらせやがつて……キャンプに残つてたあいつ等、無事なんだろうな」

「あれ、ベート、リヴエリア達を心配してるとの？ めつずらしー！」

「うるせえ！ あいつ等が荷物を守つてねえと深層から帰れねえだろうが！ 薬の有無で口ボに走つて貰わねえとなんねえ場合だつてあんだ、勘違いしてんじやねえ！」

恒例のようにティオナとベートが言い争いを始めるなか私は警戒を解けずにいた  
微かながら芋虫共の移動する様な音が聞こえるのだ  
私が警戒しているのを察してフィンやアイズも表情を引き締めていた  
来る……つ！

「ガルアアアアアア！」

私が吠えた直後である

木をへし折る遠くから響いてきた破碎音が届いた

音源の方角を見つめ待ち構えているとそれは現れた

「……あれも下の階層から来たっていうの？」

「通路を壊しながら進めば……なんとか？」

「馬鹿言わないでよ……」

半ば呆けたようなティオナといつの間にか治療していたティオネの会話が静まり

返った場にやけに響く

およそ6Mはあるだろうか

先程まで戦っていた芋虫よりも一回り程大きく上半身が滑らかな線を描き、明らかに人の上体を模した形をしていた

扇に似た厚みのない扁平上の腕には二対四枚で、後頭部からは何本も垂れ下がる管の様な器官がある

濃厚な色彩が及ぶ顔面部分には鼻も目も口もないが、線の細さから女性のものを連想させた。が、大きく盛り上がった腹部が女性的な要素を全て台無しにしていた、そして何よりもあまりに醜悪である醜き者フリュネにも匹敵した

あの腹部の途轍もない量の腐食液がまき散れば辺り一面は死の充満する世界だろう  
素早くフィンの指示が出た

「総員、撤退だ！速やかにキャンプを破棄し、最小限の荷物を持ってこの場から離脱する！リヴエリア達にも伝えろ」  
「おい、フィン！逃げんのかよ！」

「あのモンスターをほつとくの!?」

フィンの意見にベートやティオナが囁み付く

「僕も大いに不本意だ。でもあのモンスターを始末して、かつ被害を最小限に抑えるにはこれしかない。月並みの言葉で悪いけどね」

フィンは表情を消して、アイズに、そして私に向き直った

「アイズ、君が討て。距離を取つたら信号を出す。それまでは時間を稼いでくれ。ロボ、アイズを頼んだよ」

「わかった」

「ガウ！」

フィンに制止の声が掛かっただけど一喝し鎮めた。そしてラウルにリヴエリアに撤退の合図を出させ、私とアイズを残し離脱した

「ロボ、援護をお願い……【目覚めよ】」

風を纏つたアイズが女体型と相対する  
女体型は無貌に見えた顔面部に横一線の亀裂が走り口腔を開放し、そこから鉄砲水のような勢いで腐食液が打ち出される

目的は時間稼ぎである

ならば取るべき行動は撤退中のフイン達とは別の方向に回避することだ  
幸いにも女体型はアイズを標的にしているのだから誘き出せるだろう

しかし女体型は四枚の腕を大きく振り、そして目を疑うような夥しい量の光粒がアイズの頭上を覆つた

「ガルアアアアアア！」

アイズに降りそそぐきらめきを放つ極彩色の粒子群が私の咆哮により吹き飛ばされ  
女体型の近くで幾つもの爆発が巻き起こつた  
爆発の衝撃が更に女体型の腕から粒子群が舞い上がり新たな爆発を起こす

『アアアアア!?』

懐で巻き起こつた爆発の連鎖に女体型は絶叫し管の髪や腕を振り乱し悶える  
その間にアイズは私の近くまで下がってきた

「ありがとう……信号、まだかな?」

「……バウ」

女体型が悶え苦しんでいる今、殺そうと思えばいつでも殺せるけど信号がないため手  
を出すわけにはいかない

「練習してたアレ……やってみる?」

「ワン!」

アイズの提案に私は頷き身を屈める。そしてその背にアイズが乗り私を含めて風を  
纏つた

アイズが武器に風を付与する時、武器にも相当な負担を掛けているため直ぐに折れてしまう。これは人に対しても付与の負担は変わらず何度も傷を作りながら負担を少なくし風を付与する練習をしたのだ

その結果、未だ多少の負担は有れど私はアイズを背に乗せ風を付与することに成功した

これが今回、フインが私をアイズに付けた理由でもある  
出来なくとも残るつもりだつたけど

悶える動作が緩慢的になつてきた

そろそろ女体型も動き出す頃だろう  
信号は未だだろうか

そう思つた直後、遠くから破裂音と共に遙か上空に閃光が打ち上がる  
待ちに待つた撤退完了、そして目標撃破の許可である

「ロボ……つ！」

「ガウ！」

アイズが声を発すると同時に大きく後ろに跳躍し一枚岩、その上部壁面に着地し膝を折り力を溜める

もはや嵐と言える風を纏いアイズは剣を引く

放つのは今持てる最大威力の一撃

女体型に向け足のバネを最大限に使った高速の跳躍と後押しさせる風の加速からもたらされる神風

アイズは静かに主神に命名されたその名を唇に乗せた

「リル・ラファーガ」

それは女体型を貫き風穴をあけ、そして桁外れの大爆発を起こした

## 17話 white rabbit

私は狼である

名前は狼王ロボである

ダンジョン中層

そこは私がかつて長き眠りに着いた18階層を含むレベル2に上がった冒険者達が踏み入る階層であり、ある意味では中層からがダンジョンの始まりだとも言える層である

そんな層を私は17階層から順に数多の逃げる獲物の臭いを追いかけ疾駆していた

18階層で遠征に参加した人員を2班に分け地上へと戻る事にしたロキ・ファミリアはリヴエリア、ベート、ティオネ、ティオナ、レフィィーヤ、ラウル、そしてアイズを含めた十数人を前行部隊とし私はフインやガレスと共に後行部隊として18階層に待機

となつたのだが17階層で遭遇したミノタウロスの群れが上階に向かつて逃走してしまつたのだと言う

私はリヴエリアからの要請を受けこうして獲物たるミノタウロスを追うこととなつた

そもそもアイズと私を別の班にするからこうなるんだと思うんだよね。ベートを後行部隊にしておけば良かつたんじやないかな？リヴエリアがいるんだからレフイーヤを後行部隊に回しても良かつたかも？

まあ、今更そんな事言つても後の祭りだけど

先行しているアイズ達を追い掛け各階に散らばつたミノタウロスは他のロキ・ファミリア団員が追つているようだから無視して遭遇したモンスターは食い殺し魔石を噛み砕きながら上階へと向けて疾駆する

そうして5階層に辿り着いた私は漸くアイズとベートの背中を見付けることが出来た

2人の走る先には1匹のミノタウロスと追われる真っ白な髪、深紅の瞳をした一見し

て兎のような外見のヒューマンの少年がいた

「ガウッ！」

「ロボカ！」

「ロボ……っ！ 行つて！」

私の声にアイズとベートが振り向く

2人の間を走り抜け視線の先の光景に向かい更に加速する  
ルームの隅に追い込まれた小兎はミノタウロスの巨体を見上げ、引きつった顔で唯  
唯、振りかぶられた豪腕が振り下ろされるのを待っていた

埃まみれの白髪、涙腺を決壊させた赤い瞳、恐怖に震えるだけの哀れな小兎は次の瞬  
間には別の恐怖で身を震わせるのであつた

その小兎は次の瞬間には全身を血塗れにしていた

小兎の目の前には凶悪な顔をした白い毛の巨狼が今まで小兎を追い掛けていたミノ

タウロスの首元に牙を突き立てて食らい付き白い毛を鮮血で赤く染めていた  
ミノタウロスは体内の魔石を巨狼に喰われたのか灰となり居なくなつたが巨狼だけ  
で十分に恐怖である

小兎から見たら恐怖でしかない巨狼であるロボだが

力加減を間違え鮮血を浴びてしまい、その上ミノタウロスの灰まで被つてしまつた、  
その気持ち悪さに顔を歪め口にも灰が入り咳き込んでいた

「ロボ！…………大丈夫？」

追いかけてきたアイズが咳き込むロボに駆け寄り心配する

小兎はその光景を呆然と目を見開き見ていた

それに気付いたアイズが地面に腰を付き身動きひとつ取らない小兎と向き合いそつ  
と声をかけた

「…………大丈夫ですか？」

正面から見下ろす格好のアイズの問い掛けに未だ小兎は身動きひとつしなかつた  
しかしアイズを見上げるその顔は少しづつだが確かに赤く染まり始めていた

「立てますか？」

そう言つてアイズは手を差し伸べる

差し出された手に一瞬視線を止め、再びアイズの整つた相貌に視線が行き、瞬く間に  
顔だけでなく首なども真っ赤に染め上げ小兎は弾かれたように起き上がり

「だああああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あ!?」

叫びながら全速力で逃げていったのだった

後に残されたのは呆然と立ち尽くすアイズと口の中を追い付いたベートから貰つた  
水で濯ぐ口ボと震えながら腹を抱えるベートだけだった

# 18話 豊穣の女主人

私は狼である  
名前は狼王ロボである

あれからダンジョンから出た後血塗れなのを気にせずアイズが私の背に乗ってきた事や、それを見た街の人々が騒がしかつた事、レフイーヤがロキにセクハラされた事以外に問題が起ることもなくロキ・ファミリアの拠点である黄昏の館へと帰還した私は浴びた血や埃を落とすために風呂へとやつて来ていた

何故か私を洗うと浴室まで付いてきたロキがまた一緒にいたレフイーヤにセクハラしていた

このセクハラさえなければ本当に良い神なのだろうけどセクハラが全てを台無しにしていると思われる本当に残念な神様だよ

ところでそろそろ洗ってくれないかな？

血が固まつたところとか痒くてしようがないんだよ？

湯気で溶けだした血が気持ち悪くてしようがないんだよ？

「クウゥゥン」

嘔げな鳴き声が騒がしい浴室に悲しく通るのだつた

「夜は打ち上げやるからなー！遅れんようにー！」

翌日、ティオネ、ティオナ、レフィーヤ、アイズに連れられ私は依頼されていたカドモスの泉水を届けるため北西のメインストリートを歩いていた勿論、背にはアイズが乗つていて。そして辿り着いた場所は巨大な白一色の石材で造られた建物である

そこは荷運びで度々訪れる建物であり依頼主であるデイアンケヒト・ファミリアの店であつた

「いらっしゃいませ、ロキ・ファミリアの皆様……お久しう振りです、ロボさん」

「アミツド、久しぶりー」

店に辿り着いた私達を出迎えた少女、アミツド・テアサナーレにティオナが気さくに手をあげる

「本日のご用件は、引き受けて頂いた依頼の件で間違いないでしようか？」

「ええ、今は大丈夫？」

「はい、どうぞこちらに」

建物内を移動しカウンターの一角へと案内された私達は恙無く報酬のエリクサー20数本を受け取りを行つた……までは良かつたけれど

「アミツド、実は深層で珍しいドロップアイテムが取れたの。ついでに鑑定してもらつても良いかしら？いい値を出してくれるなら、ここで換金するわ」「わかりました。善処しましょう」

持ち出されたのは51階層で手に入れたカドモスの皮膜である

市場に滅多に出回らないドロップアイテムであり回復系のアイテムの原料としても重宝される希少アイテムである

カドモスの皮膜を前にアミツドの提示した金額は

「700万ヴァリスでお引き取りしましょう」

「1500万」

——ここぞとばかりに吹っ掛けるティオネにティオナとレフイーヤが目を剥きア  
イズさえも驚いた

その後も商談が続き、あることないこと話すティオネと堅実にアミツドの商談は結局  
1200万で確定した

「ごめん、アミツド……」

「ワウ……」

ティオネの強引な商談についつい謝つてしまふ私とアイズに心優しいアミツドは「足元を見て依頼を発注したのは此方ですから。お互い痛み分けで手打ちにしましよう……どうしてもというなら今度、ロボさんをモフさせてください」と告げられてしまつた

その後も遠征の後処理として武器を溶かされたティオナとアイズの武器の整備のためゴブニユ・ファミリアの元へと向かつた私達だがティオナが職人達を絶叫させるというある意味いつもの風景を作つていた

「ミア母ちやーん、來たでー！」

夜になり私達はロキに連れられ西のメインストリートの中で最も大きな酒場、豊穣の女主人へと来店した

なんでも遠征の後は盛大に酒宴を開くのがロキ・ファミリアの習慣なんだとかどう考へても便乗してロキが酒盛りしたいだけである少なくとも私はそう思つてゐる

ヨキ・ファミリアは人数の多い。全員が来ているわけではないけど、それでも打ち上げに参加する人数はかなりの人数であり店に入りきらないため打ち上げは店内組とテラス組に別れて開かれた

勿論、私はテラス組である

豊穣の女主人の店長であるミア母さんには入つても良いと言われてるけどロキ・ファミリア以外にも客がいるため今回、私は遠慮して背に乗つていたアイズには中に入つてもらつた

「犬つころ！ こいつも食うにや！ オマエじやテーブルのは取れニヤいだらうから分けてやつたニヤ！」

どう考へても客に対する態度じやない猫人族のウエイトレス、アーニヤが壁際で最初に分けてもらつた料理を食べていた私の前に新しい皿を置いてきた

「ワン！」

「殊勝な心掛けニヤ！やつぱりオマエは見所あるニヤ！」

アーニャは何故か私の言葉が通じるらしい事が分かつてから見掛ける度に絡んでくるようになった。同じ猫人族である同僚のクロエには私の言葉が通じないことが更に気を良くしているのかもしない

「そうだ、アイズ！あの話を聞かせてやれよ！」

アーニャが店内に戻り暫くすると遠征の話題で盛り上がっていた店内からベートが何かの話題を催促する声が聞こえた

「あれだつて、帰る途中で何匹か逃がしたミノタウロス！ロボが5階層で最後の1匹を始末した時にいたトマト野郎の！」

どうやらベートが催促しているのはあの小兎の話のようだ

「ミノタウロスつて、17階層で襲い掛かつてきて返り討ちにしたら直ぐに逃げ出していった？」

「それそれ！奇跡みてえにどんどん上層に上つていきやがつてよ！俺達が泡食つて後行

部隊だつた口ボまで呼んで追い掛けていったやつ！こつちは帰りの途中で疲れてたつてのによ～」

ティオネの確認する声とジョツキを卓に叩き付ける音が響き更にベートの声が続いた

「それでは、いたんだよ、いかにも駆け出しつてな感じのひょろくせえガキが！」

ベートのテンションが高い、どうも酔つてるらしい  
機嫌良さそうなベートの語りは続いた

「抱腹もんだつたぜ、兎みたいに壁際へ追い込まれちまつてよお！可哀想なくらい震え  
上がつちまつて顔を引き釣らせてやんの！既の所で口ボがミノタウロスを噛み殺した  
んだけどよお、口ボも焦つてたのか力の入れ方間違えたらしくて血が吹き出ちまつてソ  
イツも全身に血を浴びて……真っ赤なトマトになつちまつたんだよ！」  
「うわあ……」

ティオナの呻く声が聞こえた

あれは本当に悪いことをしたと思う

ごめんね小兎君

「しかもそのトマト野郎よお、アイズに話し掛けられたら叫びながらどつか行つちまつてよ……うちのお姫様、話し掛けただけで逃げられてやんのっ！」

「アハハハツ！ そりや傑作やあー！ 冒険者怖がらせてまうアイズたんマジ萌えー！」

!!

せつかくアーニヤが取り分けてくれたご飯が不味くなつてきた

酒は呑んでも呑まれちゃ駄目だよベート

……久し振りにO H A N A S I しなくちゃ駄目かな？

その時は口キも一緒かな？

「アイズはあるのガキと俺、ツガイにするならどつちがいいよ。雌のお前はどつちの雄に尻尾を振つて、どつちの雄に滅茶苦茶にされてえんだ？」

うん、O H A N A S I 確定だね

ついでにちょっと本気の実戦訓練もやろうか

「ろ、ロボさん？ 落ち着いて下さい！ ジャガ丸くん買つて来ますから！ ね？」

テラスにいた団員が私に落ち着くようにいつてくるけど変だね？ 私はこんなにも落ち着いてるのに

「雑魚じゃあ、アイズ・ヴァレンシュタインには釣り合わねえ」

そんなベートの声が聞こえてきた直後、白い影が店の外へと飛び出しそのままバベルの方へと走つていった

私は飛び出していつた影を知っていた。ベートの話の中心だった冒険者、ミノタウロスに追われていた小兎だ

自分の事を酒の魚にされたのだ悔しかつたのだろう

ベートの話を最後まで聞いていたのだからきつと、あの小兎は逃げたんじゃないのだろう

それくらいは狼の私でも分かる

小兎を追うようにアイズが店の中から出てきた

アイズも当事者である以上、心中穏やかじやないだろう

しかしアイズはこれで臆病でそして口下手だ、追い掛けで何が言えるのか。そんなことを考えて踏み出せないだろう

なら私が一肌脱ぐしかないだろう

「ワン！」

「……ゴメン……お願い……」

アイズも私が言いたいことは伝わったのだろう、お願いされた  
さあ、小兎くんを追うとしよう……その前に

「ガウ！」  
バカが！

店内で酔っ払った駄犬を殴って気絶させアーニヤに頼み縛つて貰つた

さあ、改めて追い掛けましょか！

# 19話 小兎の意地

私は狼である  
名前は狼王ロボである

私は今、古巣であるダンジョン上層へと帰つてきていた

以前、住んでいた上層は駆け出し冒険者達が油断さえしなければソロでも比較的安全に探索できる階層ではあるが、それは多くの冒険者がいる日中に限る話であり、夜はレベル2の冒険者だとしても危険な程、モンスターが溢れる空間へと化す

そんな夜のダンジョンに1人の冒険者がモンスター達と戦つていた

白い髪を自分の血と汗で濡らし、その手に握ったナイフでゴブリンやコボルトを唯、我武者羅に倒していく

地面には、その冒険者が倒したモンスターの魔石とドロップアイテムが散らばり、数

は既に100を越えていた

それだけの数のモンスターを冒険者は一人で相手取っていたのだ。それを私は壁に身を隠し、時折透明化してじつと見ていた  
見ていることしか出来なかつた

いや、見ているしかないのだ

逃げるしか出来なかつた事が悔しかつたのだろう

ただ強くなりたいのだろう

だからこそ無茶をする

その姿に私はアイズを重ねてしまつた

出会つてから8年間、強くなるために私に挑み続け  
レベル5になつた今でもアイズは私に挑み続け絶対に強くなるための努力を惜しま  
ず戦い続けている

そんな姿を8年間見てきたのだ

た その私が強くなるための努力をする冒険者——小兎の邪魔をするわけにはいかなかつ

どれ程の時間が過ぎただろうか

ウォーシャドウと呼ばれる影のようなモンスターを倒したのを最後に小兎は引き返  
しはじめた

本来なら敵わない筈の格上を相手に戦っていたのだ、体力も限界にきたのだろう  
3階層の途中で倒れ動かなくなってしまった

アイズといい小兎といい無茶をする子は私の前で倒れるのが好きなのかな？

アイズにも小兎の事を頼まれたのだからしようがない  
これくらいのお節介なら飯よね？

私は倒れた小兎を襟首を咥え背に乗せ地上へと歩き始めた

地上に戻ったときには既に夜は明け日の出を迎えていた  
日中はかなりの人でごつた返す大通りにはひとつこひとりいない

色んな匂いが混ざつてかなり分かりにくいけど小兎の匂いは確かに感じることがで  
きる

さてと小兎の住処は何処にあるのかな?

Let's Pursuit!

小兎の匂いを追い掛けていると周りの風景が廃墟ばかりになつてきた  
え? 小兎、こんなところに住んでるんじやないの?

人間つてもつとちゃんとしたところに住んでるんじやないの?

私の8年間の地上生活がどれだけ恵まれたものだつたのかを思い起こしながら匂い  
を追い掛けていると廃墟と化した協会に行き着いた

屋根が落ち、壁に穴が開き、スタンダードグラスが割れ、十字架は朽ち果てている協会の  
扉に少女が一人背を預け項垂れていた

匂いの感じからして神であることは間違いない、そして私はこの匂いを知っている。神なのに嫌な感じが一切しない暖かい匂いと仄かに香るジャガ丸くんの匂いは、良く行くジャガ丸くんの出店で売り子をやつていた神だ

明け方からこんなところにいる事や小兎の衣服から微かに売り子神の匂いがする事から待ち人はこの小兎なのだろう。なら、小兎が起きる前に預けてしまおう

そう思つたら売り子神の方から駆け寄ってきた

「ロボ君!! 何でこんなところにいるんだい!! いや、そんなことより、ベル君を！ 僕の眷属を見かけなかつたかい！ 白髪赤目の兎みたいな感じの男の子なんだけど！」

駆け寄つてくるなり問いかけてくるのは小兎の事

拠点はこんな所でもとても大切にされているのが伝わってきた

私は背に乗せた小兎を売り子神の前に下ろすと透明化を使い呼び止められるのを防止し直ぐに黄昏の館へと歩みを進めた

彼は強くなるだろう

あれだけ必死になれるのだから

私もいつかはあそこまで必死になれる時がくるのだろうか  
その時、私は何を思うのだろう

## 20話 アイズの葛藤

「今日も元気ないなあ、アイズたん……」

胸壁に寄り掛かりながら、ロキが呟いた

ロキ・ファミリアのホーム、黄昏の館の空中回廊。塔と塔を繋ぐ石造りの渡り廊下からは眼下にある中庭が見張らせる

ロキの視線の先、数本の庭木と僅かな芝生がある空間の中で、金髪の少女が寝そべる蒼白い毛並みの巨狼を背凭れに座っていた

「昨日一日もずーっとあんな感じやつたし……」

「珍しいを通り越して不可思議だな、アイズが時間を無為に過ごすのは」

「そうやなあ……ロボオ、羨ましいわあ」

回廊には巨狼に嫉妬の視線を向けるロキの他にもう1人、アイズを見守る亜人がいた  
凜々しい雰囲気を纏う麗人、リヴエリアは胸壁に肘をついているロキの隣で言葉を交

わす

「いつもなら遠征の後だろうがダンジョンに突っ込むし、ロボ以外が止めても聞かんし、そのロボもウチらが頼み込んで必要って判断したときしか止めてくれんし……まあ、目の届くところにいてくれる分、こつちは安心できるんやけど」

「そこは同意するが、ああも塞ぎ込んでいる原因是、やはり酒場の一件だろう」

「そんなにベートにセクハラされたの嫌やつたんかなあ。あの温厚なロボもめっちゃ怒つとつたし。あ、因みにベートも凄い勢いで凹んでるで。ロボのO H A N A S I 付きやつたからなあ」

「知らん。自業自得だ」

酒場で開いた遠征の祝宴はもう2日前になる

1人アイズが外に出たあの後、入れ替わるように入ってきたロボによつてベートが昏倒させられ、ロボと仲の良い店員により縄で身動きを封じられた後、ティオナ達の報復を受け、店の外に吊し上げたのだ

目を覚まし事の顛末をロボのO H A N A S I 付きで聞いたベートは今はやつてしまつたとばかりに項垂れており、ティオナ達と常にアイズの側にいるロボによりアイズ

に近付けさせてすら貰えていない

「でもあんなやり取りで落ち込むほど、アイズたん纖細やないし……そんくらいならロボが慰めるのはずやし……」

「他に原因があつたということか」

「多分な。あの後、ロボが明け方まで帰つてこんかつたつて報告もあつたし、関係ないとは思えんのよなあ」

リヴェリアは首を傾げ、何もするわけでもなく中庭にいるアイズとロボを警見する  
当時の酒場で他に思い当たるのは、アイズの前に外に向かつた店員と、姿を見ることが  
もかなわなかつた客の1人

恐らくはロボはアイズの沈んでいる理由を知つてゐるのだろう。しかし、ロボがアイズの断りなく教えてくれるはずもない

「リヴェリアに任せた。ウチがあれこれするより、そつちの方がええやろ。じゃ、後はお願いな、ママ」

目の前を通りすぎていく際、肩に手を置いて、ロキは回廊から去っていく  
リヴエリアはロキ・ファミリアの中でも古株も古株だ  
ロキはもとより、彼女はアイズとの付き合いが長く、何よりロボの次に深い

「……誰がママだ」

溜息をつきながら、リヴエリアは中庭へと向かつた

私は狼である

名前は狼王ロボである

中央搭を囲むように出来ていて円環型の中庭で私は芝生の上に寝そべり朝日を浴びて微睡んでいた

そんな私の身体を背凭れにアイズは座つてただじつと空を見上げていた  
アイズは昨日からずっとこんな感じで毎日のようやつていた追い掛けっこもやつ

てない

やはり小兎、確かベルだつたか。彼の事を気にしているのだろう  
ベルがあの後1人で夜のダンジョンに潜つていたことは一応伝えてある。余計に氣  
にやむとは思つたけどアイズには伝えるべきだと思つた

原因を作つたベートにも説教をして暫くはアイズに近付かないようになつた  
いつものベートの罵倒がそのままの意味じやないことくらいは私にも分かつてゐる。  
けど、あれはない。酔つた勢いとはいへ、あれでは唯の発情犬だ。礼節と誇りを持たな  
い狼は唯の犬である

あれで狼の名を冠するとは……私は溜息をついた

「アイズ」

そんな事を考へてゐるとリヴエリアが現れた

「リヴエリア……」

「相変わらず早いな。恒例のはしていないようだが」

何処からか見ていたのだろうか？

視線をリヴエリアと合わせていたアイズは、その金の瞳を私の顔に向けそつと頭を撫でる

これは何か気まずいときに良くやるアイズの癖だ

この癖のことはリヴエリアも良く知ってるからか、ほんの少し間が空く

「何があつた」

アイズは顔を上げ、しかし私の頭はなで続けている

言うべきか葛藤しているのだろう。小さく視線が彷徨つている  
暫くすると決めたのだろう。ぽつぽつと、アイズは話し出した

「酒場であつた、ミノタウロスの話……」

「ああ」

「逃げた男の子……冒険者が、あの酒場にいて……」

語られるのは酒場で起きた私とアイズにしか分からぬ出来事

直ぐにベートを止めなかつた私達の罪であり後悔の話。そして私が見たベルの努力の話

「口ボは止めなかつたのか！見ていたのだろう！」

案の定怒られた

いや、アイズ以外にこの話が知れたら怒られるだろうな。とは思つていたけど怒つた  
リヴエリアはやつぱり恐い

私は誤魔化すように顔をそっぽに向けた

「口ボを怒らないで……止められなかつたんだと思うから……」  
「……それで、お前はどうしたい？」

リヴエリアが溜息をついて再度アイズに尋ねた

私の事は置いておくことにしたらしい。ありがとう、アイズ

「……分からぬ、けど……謝りたい、んだと思う……」

アイズは小さな声で、そう答えた

「そうか……」

「……」

会話が途切れ、見計らつたように、館全体へ伝わる鐘の音が鳴り響く朝食を知らせる合図だ

「自信がないなら、まだ悩め。お前は1人じゃないんだ。言つてくれれば、相談にも乗つてやる

「うん……」

「朝食だ。行こう」

リヴエリアはそう口にし、踵を返す

アイズが立ち上がり私も起き上がり彼女の隣に立つ

「リヴエリア……」

「？」

「……ありがとう」

アイズの表情に淡い温もりが宿る。ああ、トリヴエリアも頬を緩め振り向いた顔を戻し、中庭から搭へと向かつた

「……口ボ、行こつか……いつもありがとう」

私の背に乗り頭を一撫しそう言つた

## 21話 アイズの休息日、私の1匹歩き

「むー」

腕を組み、ティオナは唸る

「ティオナさん？」

「なに難しい声出してんのよ」

朝の食堂でレフィーヤとティオネに見つめられながら、ティオナは考え込む

「アイズ、まだ元気なかつた」

朝食を終えた今、隣で口ボに座っていたアイズはもういない  
今日はいつもの四人十一匹での食事を取つた。話題を振つてやれば、言葉少なながら  
普段通りの受け答えが返つてきて、その様子は何も変わりないよう見えた

しかしだ。今のアイズは本調子ではない。ティオナにはそれだけは分かつた

「ベートに腹を立ててる……はないわね。ロボのお説教があつたものね」「関係なくはないかもしれないけど、別のことでもまだ落ち込んでる」

ティオナは考えることが苦手である

アイズの心に配慮して気を利かせるなんて出来ないだろうし、悩みそのものを解消してやることも無理だろう。お節介を焼きに行つてもきっと失敗するこれまでも、そしてこれからも、ティオナは能天氣な振る舞いで、アイズから笑顔を引っ張り出してやることしか出来ない

「レフフィーヤ、ティオネ。今日の予定はなんかある？」

「いえ、特には」

「あたしは今日も団長のお手伝いに……」

「じよあ暇だね！今日あたしに付き合つて！」

「ちよつとつ！」

小難しい事は放り出して、ついでに座っていた椅子も飛ばし立ち上がる

「あたし、アイズ探してくる！」

勢い良く大食堂を飛び出す

動き出したら止まらない猪のように、ティオナはホーム中を駆け回った  
道すがら手当たり次第に扉を開け階段を上つては下り、回廊を行つたり来たりと繰り返した

「……おい」

「わっ!?」

幅狭な廊下を走つていた時だ

長い足が横木のように壁にかけられ、ティオナの行く手を阻む。既のところでどうにか停止したティオナは、いきなり通せんぼしてきたベートを睨み付けた

「ちょっと危ないじゃん！ 退いてよ！ ロボ君に言いつけるよ！」

酒場の一件も引きずつて、敵意全開にするティオナに対し、口を引き垂るベートは、窓の外を顎でしゃくる

「アイズなら、中庭にいるぞ。ロボも一緒だ。言いつけんなら好きにしろ」「え……？」

呆気に取られるティオナを見て、ベートは足をどけ、不貞腐れたようにその灰髪を手でかきながら、直ぐにその場を離れだした

廊下の奥へ消えた背中に、調子が狂ったような表情をしたティオナは、両目を瞑つて舌を突き出した後、素直に中庭へと向かつた

私は狼である

名前は狼王ロボである

朝食の後、私とアイズは再び中庭に腰を下ろした

芝生に寝そべる私を背凭れにアイズはまた空を見詰めている

アイズがどうしたいのかは分かつて

しかし、それで私が動いて良いのかが分からな

ベルを捕まつ……連れてきたら早いのかもしれないけど、下手したら余計拗れること

に成りかねない

私は溜息をついた

「ア～アイズ！」

「……ティオナ？」

目の前に現れたティオナに、アイズの金色の瞳が瞬きをする

ティオナはアイズの両手を取り、立ち上がらせた

それに伴い私も腰を上げる

「買い物に行こう！」

置いていかれた

ティオナの言う買い物はどうやら服だつたらしい

そして、私の毛を売り物に付ける訳にもいかず。私は1匹街中を練り歩くこととなつた

この8年間で何度か別行動をとることはあつたけど、もしかしたら仕事以外で別行動を取つたのは初めてかも知れない

よし！今日は新しいジャガ丸くんの屋台を探そう！

良いところがあつたらアイズを連れて行こう！お土産物も買っておかなきや！  
未知のジャガ丸くんを求めて……Let, s Eating!

「までまでー！キヤハハハ」「回り込めー！」

何でこうなつたの？

時刻は正午を過ぎた辺り

少し大きめの広場で私は元気な子供達に追い掛けられていた

初めは広場で泣いている子供を見つけて、あやす為に背中に乗せたはずだったのに、いつの間にか沢山の子供達に集られ、逃げたら追われ、子供が転んでは助け起こしに戻り、再び追い掛けられた

「ワ、だ、誰か助けてー！ワオーン！」

私の悲しき叫びと子供達の笑い声が木霊した

結局、日が暮れはじめ

子供達の親が迎えに来るまで、私は遊び相手をやらされた  
子供達の遊ぶときの体力は無限なのかな？何故かアイズと追い掛けっこしてると  
よりも疲れた……というか疲労困憊で広場に伏していた

「大丈夫……？」

私にもお迎えが来たらしい

視界に夕焼けを背に煌めく金色の髪が写つた  
お迎えは天国の天使ではなくアイズだつた

「お疲れ様……」

「……ワウ」

アイズが手を伸ばし、私の頭と首を撫でる  
子供達の、無遠慮で雑な撫で方とは真逆。優しい、労るような手付きが心地良い

自然と自ら手に頭を擦り付けてしまう

「……口ボが甘えるの、珍しいね」

「ワウ！」

「うん……帰ろ。ジャガ丸くん……買つて帰ろうか」

「ワフ！」

アイズを背に乗せ、私は歩き出した

その後、私達はジャガ丸くん小豆クリーム味を齧りながら帰路についた  
その間、ずっとアイズは私の首回りや頭を撫で続けていた

## 22話 怪物祭

モンスター・フィリア祭

フィリア祭や怪物祭とも呼ばれる、ガネーシャ・ファミリアが1年に1度主催する祭である

ガネーシャ曰く、モンスターとの距離を縮める為の祭なのだとか

ティムで調教などと言つて人間側が痛め付けてくる時点で私は逆に距離を取りたくてしようがないのだけれど何故か毎年オファーが来る上、これまた何故か口キが勝手に承諾してくるから困つたものである

そして、例の如く今年もガネーシャ・ファミリアからオファーを受けてしまった（強制）私は開催前日からガネーシャと初めて会つた広場一円環闘技場アンブレイティアトルム（中）に設けられた檻の中に押し込まれた

うん、良いんだよ別に。毎年の事だし。私の係りは新人達の仕事らしいし。ジャガ丸くんじゃないけどご飯は貰えるし。でもね？監視は止めようよ！見られてると眠り難いんだよ！

毎年アイズを通して御願いしてゐるのに何で余計に監視されるんだろう？

そして毎年恒例、寝不足のまま迎える怪物祭当日  
私の出番はいつも締めに回されているため基本的には午前中は特にやることもなく  
暇である

アイズは寂しがつてないだろうか？

ティオナは皆に迷惑かけてないかな？

ティオネは今日はフィンを誘えたのかな？

ベートは……喧嘩してないと良いけど……無理だろうなあ

早く帰りたい

初めはアイズと遊ぶ為にロキの誘いに乗った筈が気が付けばロキ・ファミリアは私の  
帰るべき場所となつている

人生、いや、狼生分からぬものである

何か外が騒がしい

感覚的にだけまだお昼になつたかなつて所のはずだけど騒がしいと思うほど盛り上がる時間じゃないはず

そう思つていると変な仮面を付けたガネーシャ・ファミリアの団員達が慌ただしく入ってきた

「緊急事態です！捕獲していたモンスターが街に逃げ出しました！至急応援願います！」

「逃げたモンスターは27体！既に、各方面に応援要請を出してはいますが、ダイダロス通りにも逃げ込んだという報告もあり、難航しております！」

変な仮面の状況説明を聞きながら、檻が解錠されるのを待つ私は、既に感情が溢れだし、白い毛を蒼白く染め上げる

何年も開催している怪物祭で、今更こんな事故が起きるわけがない

なら、これは故意に起こされた事になる

迷宮の中ならまだしも街中でモンスターを逃がすなんて馬鹿げた真似、冗談じやない

！

アイズだって楽しみにしてたのに！  
限定ジヤガ丸くんを探すって言つてたのに！  
絶対に許してなるものか！

「檻、解放します！ロボさん、お願ひします！」  
「ガルアアアアア！」

私の咆哮がオラリオの街に響き渡る  
少しでも人的被害が無いことを願い私は駆け出した

## 23話 怪物祭2

円環闘技場から出た私が見たものは壊れた屋台とそれに下敷きにされた人達、巻き込まれて怪我をした人や泣いている子供達、そして必死に避難誘導するギルド職員と冒険者達の姿であった

この騒ぎを起こした奴はこの光景を見ているのだろうか  
見ていたとして何を思っているのだろうか

後悔しているのならばまだ救いがある

しかし、愉悦を浸つてているのだとしたら救いようがない屑だろう

さあ、応報の時だ

犯人探しは後回し

今は、未だ暴れる畜生共を駆逐するとしよう

「ガルアアアアアア！」

無意味なかもしないけど何もしないよりはマシだと思い注意を集めようと咆哮する。

聞こえているなら弱いモンスターなら目の前の獲物を放つて逃げようとするだろう。闘争心の塊のような馬鹿なら向かつて来る筈だから気配を撒き散らしていれば勝手に寄つて来る。

逃げるような奴なら近くに来ただけで隠れるか慌てて飛び出していくだろう。私は取り敢えず近場からモンスターの臭いを辿つて駆逐して行く事にした。

定期的に咆哮を上げては馬鹿を呼び寄せ弱い者は臭いを辿り虱潰しに駆逐していくた。

数えていたら何故かガネーシヤ・ファミリアの団員から聞いていた数よりも多くのモンスターを倒していたのだけど何なんだろうか？報告ミスならアイズに教えて苦情を入れなければ

特に植物型のモンスターがいるなんて報告を私は受けた覚えがない。

そもそもとして今まで見たことのない魔物なんだけど、アレ何なんだろう？

「レフイーヤ!?」

円環闘技場付近から植物型のモンスターの臭いがし戻つてきたら聞き覚えのある二人組の声が聞こえてきた。

急いで現場に駆け付けてみれば、そこには崩壊した屋台の残骸の上に血を吐き横たわるレフイーヤと口を大きく広げた植物型モンスターの姿だった。

ああ、殺そう

私の怒りに呼応するかのように足元から影が沸き上がり全身を包み込む。抑え込めない怒りが炎となり蒼い炎が口から漏れ出る。

しかし、理性は失わない。微かにだけど確かに近づいてくるアイズの匂いがする。もうアイズを泣かせないようにあの時のように意識は飛ばさないように何とか抑える。

怒りの衝動を抑えながらもモンスターに先手を打たせたりはしない。  
レフイーヤの前に飛び出し影を伸ばし威嚇し薦を払い飛ばす。

同時にアイズも到着し金と銀の閃光が植物型を捉え粉碎し私の隣に着地した。

「アイズ！ 口ボ！」

ティオナの歎声が上がるけど、状況としてはあんまり芳しくない。

地面が隆起し、新たに三体の植物型が姿を現したのに引き換え、アイズの手にしてい

たレイピアが亀裂音の後、砕けてしまった。

「ちよつ！今度はロボとアイズだけっ!?」

「多分、魔力に反応してるのでよ」

その推測は合つているのだろう。私の影は魔力で形作られているからか、植物型の蔓が影を追いかけるような挙動を何度もかしているのが良い証拠だろう。

アイズが魔法を使うのを止めれば標的が私だけに絞られてもう少し戦いやすくなるだろうに、アイズはティオナやティオネの声どころか、私の声も聽かずに魔法を維持して戦っている。

私だけを狙わせないためか、それとも狙いを分散させて救助を進めさせるためか。  
どちらにせよアイズがそうしたいなら私はもう何も言うまい。

私はここを動かず後ろにいるこの戦いに決定打を打てる少女を守つていればいいのだ。誇り高い一族たるエルフの少女、レフイーヤがあの程度で碎けるはずがないのだ。

私が終わらせてはここで成長できるかも知れない少女の見せ場を奪つてはいけないだろう。

既に私の中に怒りはなかつた。

この場で怒るべきは私ではない。

怒りを向けるべき対象は植物型ではない。

怒るべきはレフイーヤであり私であつてはならない。

怒りを向けるべき対象は不甲斐ない己自身でなくてはならない。

「——私はつ、私はレフイーヤ・ウイリディス！ウイーシェの森のエルフ！神ロキと契りを交わした、このオラリオで最も強く、誇り高い、偉大なファミリアの一員！逃げ出すわけにはいかない！」

背後で立ち上がる音がし、己を鼓舞する声が聞こえる。

「ウイーシェの名のもとに願う！」

魔法の詠唱が開始される。

「森の先人よ、誇り高き同胞よ、我が声に応じ草原へと来れ、繫ぐ紺、楽宴の契り、円環を廻りし舞い踊れ、至れ、妖精の輪、どうか——力を貸し与えてほしい」

【エルフ・リング】

レフイーヤの足元の魔法円が翡翠色に発光し魔法の下準備が整つた。それに伴い、植物型が標的をレフイーヤへと変え始める。それを私とアイズ、ティオナ、ティオネで抑え込み動きを封じレフイーヤを援護する。

「終末の前触れよ、白き雪よ。」

ああ、この魔法は知つていてる。

過去に私も一度受けていて、威力は良く知つていてる魔法だ。

「黄昏を前に風を巻け。閉ざされる光、凍てつく大地。吹雪け、三度の厳冬——我が名は  
アールヴ！」

【ワイン・フインブルヴエトル】

三条の吹雪が吹き荒れる。

射線上から離脱する中、横目に吹雪の起こす惨状を見れば射線上のありとあらゆるもの

のが凍てついていた。

アレはヤバい。

以前に見た、そして受けたりヴィエリアの魔法よりも威力があつたように思えるあの魔

法

私は心に誓う

レフィーヤは怒らせないようにしよう・・・

## 24話 追跡

植物型の討伐を確認した私は、今回の騒動の元凶を討滅するため。モンスターの入れられていた檻のある部屋に残っていた、ガネーシヤ・ファミリアの眷属以外の臭いを辿つていた。

現場に残つていたのは神の臭いと獸人種、猪系の臭い。

現場にいた見張りの人員は例外なく魅了されていてと聞いていることから犯人はどう考へてもフレイヤ・ファミリアの主神フレイヤと団長のオツタルで間違いないだろう。

勘の良い口キ辺りは既に気付いている可能性が高いけど関係なく私は喧嘩を売りに行く。

怪我をした人がいた。

泣いてる人がいた。

屋台を壊された人がいた。

死んだ人もいたかもしない。

皆が楽しみにしていた祭を台無しにされた。

何よりもアイズが楽しみにしていた。

それだけで私が報復に行く理由になる。

とはいえる相手は素で魅了を使う神とオラリオで唯一のレベル7【猛者】おうじや オツタルだ。私が魅了を受けないかも分からなければレベル7に届くのかも分からない。

それでも私は戦わなくてはならないのだ。

アイズのためにも：重傷を負つても戦い続けたレフイーヤの為にも、アイツ等には引っ搔き傷一つでも付けてやらなければ私の気が收まらない。

臭いを辿つてアツチにフラフラ、こつちにフラフラと歩き回つていれば場所はオラリオの南東に位置するダイダロス通りの奥深くへと歩みを進めていた。

眞面な用があつてこつちに来る冒険者はほぼいないと言えるだろう。

つまりは禄でもない用があるか、私が誘い出されているかのどちらか……十中八九後者だろうと思う。

更に奥へ進むと仁王立ちしている一人の猪人ボアズ、オツタルが居た。

「・・・剣姫の犬か。何を思い私の後を付けていた」

「ガウ!!  
しらばつくれるか!!」

「・・・言葉を介せぬ獸に何を聞いたところで詮無い事か。」

そうだつた。

最近はアイズが翻訳してくれるか何となくでも伝わっていたから忘れてたけど。私の言葉つて伝わらないんだつた。

さて、どうするか・・・  
できるか?

『何が目的だ』

私は影を使い宙に文字を書いてみる事にした  
初めての試みではあつたが何とか書けた

「ほう・・・しかし所詮は犬如きには、あの方の御心は判るまい。」

やはり主犯はフレイヤか。だとしたら目的は気になる人間の試練といったところか。  
そんな事の為に多くの人を巻き込んだのだとしたら到底許せることじゃない。

ああ、殺そう

心臓が

肉体が

牙が

爪が

奴を殺せと疼く

これは応報だ

絶対的な応報だ

奴は皆から奪おうとしたのだから

だから私も奪おう

悲しむ皆の分も私が代わりに奪おう

## 25話 決意

私は狼である

名前は狼王ロボである

私が目を覚ますと何故か全身が痛かった

寝る前、というか意識がなくなる前何かあつただろうか？

そもそも私は何でベットの上で寝ているのだろうか？

「・・・ようやつと起きよつたか」

声がしたと思えばベット脇に置かれた椅子にロキが座つていた。

「何があつたか覚えどるか？」

正直何も覚えていない。臭いを追いかけていて見つけたはずなのでけど・・・なんだつ

け？

取り敢えず首を横に振つておく

「まあ、ええわ。暫く安静にしどきいや・・・アイズたん、ずっと心配しとつたんやからな？ほなな」

何か頭を撫でられた。

全身が痛いのは確かなのだけどそんなにひどいのだろうか？  
体感的には出歩けないなんて事はないはずなんだけど・・・

というか心配してたつてわりに私の背中の上で寝てるんだけど・・・アイズ  
ロキは一切気にせずに軽く手を振つて部屋を出て行つた

全然思い出せないんだけど、何があつたんだろう？  
取り敢えずアイズが風邪をひいたら大変だし毛布掛けとこうかな

食べてさて、あれから何時間たつたことか。  
外は真っ暗なのだが、何故かアイズがまだ起きない。  
私はもう痛みは殆ど引いたんだけど、アイズがまだ起きない。  
朝御飯、昼御飯、多分、夕飯の時間も過ぎていると思うけど、まだ起きない。  
何が言いたいかと言うと・・・お腹がすいたんだよ  
何故か口キが出ていつてから一度も誰も来ないしアイズは起きないしで・・・自分で  
食べに行つた方が良いのかな?

でも、アイズは放つておけないし。アイズも好き好んで寝顔を見られたくないんだろう  
し・・・

諦めて明日にしよう

そして私は再び寝ることにしたのだった

「ロボ・・・ロボ・・・」

次の日、私は揺すられて目を覚ました

目の前には何故か目元を涙に濡らしたアイズがいて正直、驚いた  
取り敢えず私はアイズの涙を拭うこととした

「良かつた。ロボが起きて良かつた」

そう言つて私の首に手を回し抱き付いてくるアイズを私はどうすることも出来な

かつた。

ただ頬擦りをしてあげることしか今の私には出来ない  
取り敢えず扉の外で悶えているっぽいロキはシメておくとして

昨日、ロキの言っていたように本気で心配を掛けてしまつたらしい

暫くはアイズの好きにさせるとして

何日か、いや、何週間かはベツタリになるかもしれない

何にしろ何があつたのかは未だに思い出せないけど強くならなくちゃいけないのだ  
ろう

そうじやないとアイズをまた、悲しませることになる

それだけは避けないとならない

アイズを守るのは私の役目なんだから

### 第3章

## 26話 日常・・・日常?

私は狼である

名前は狼王ロボである

アイズを泣かせたあの日から程無くして、包帯を取ることを許可された私は、未だにベツタリのアイズとりハビリがてら中庭で日課の素振りを見学した後の恒例である武器有りの追い掛けっこをしていた。

早朝に行われるコレは、そうそう他の誰かに見られる事はなく、その後の私の体を背凭れにした日向ぼっこの方がロキ・ファミリアでは定番とされているくらいである。

しかし、今日は珍しくも観戦者がいるらしい。  
塔の辺りから視線を感じるけどそれに気を取られたせいか危うくアイズに斬られか

けた。

「ロボ？・・・やつぱり、まだ調子悪い？・・・？」

剣を鞘に納めたアイズが心配して近づいて来て、視線に気付いた。  
視線に感じる先に向くと、庭と？がる塔の出入り口付近で、エルフの少女、レフイー  
ヤが目を見開きたたずんでいた。

胸に分厚い本を抱えている所を見るに書庫からの帰りといったところだろうか。  
目を向けられると、思い出したようにはつとして、拍手をしだす。

「す、凄かつたです！私つい見とれちゃつて、声をかけるのも忘れちゃいました！」  
「えっと、ありがとう？」

その称賛に、アイズは小首を傾げながら答えた。日課として行っていることを褒めら  
れたところでどう反応していいのか分からぬのだろう。チラチラと私に視線を投げ  
てくるけど、私も分からぬからそんな目で私を見ないで。

興奮しているのか、頬を染めて近づいてくるレフイーヤの勢いは、結局リヴィアリアが  
呼びに来るまで止まらなかつた。

「アイズとロボの鍛錬に現を抜かしている暇はないぞ。お前も修行中の身だ。朝食の時間まで続けるぞ。二人とも、また後でな」

「ア、アイズさあくんつ・・・」

リヴエリアにズルズルと引き摺られていくレフイーヤの姿は、昔のアイズを見ているようで、涙を誘つたのは私だけの秘密である。

正午頃、アイズ、ティオナ、ティオネ、レフイーヤ、リヴエリア、フイン、私の錚々たるメンバーでダンジョンに訪れていた。

今回の目的は、アイズとティオナの壊した武器の代金を稼ぐ為だというけど、どう考えても戦力過多だと思うのは私だけだろうか。

何故かアイズが過保護的に私にモンスターを回さない内に上層を越え、中層の17階層半ばまで足を進めた。

「あー、やつぱり大双刃があると落ち着くなー」

「ティオナさん、作り直してもらつていた武器、完成したんですか？」

「うん、ウルガ二代目！出来立てほやほやだよー！」

レフィーヤの問いに片手で持つた大双刃を軽々と回しながら答える。探索出発前にゴブニユ・ファミリアから受け取つてきた超大型の専用装備オーダーメイドに、彼女の機嫌の良さが窺える。

以前の物と比べて若干剣身の厚みが増しているのは壊された事への上級鍛冶師ハイスクミス達の意地なのだろうか。

それに対してティオナは無謀にも飛び出してくる虎のモンスターライガーファングを一撃で叩き斬つているが。

「ゴブニユ・ファミリアの苦労が目に浮かぶわね・・・」

嘆息しながらティオネがモンスターの死骸から魔石を摘出する。

ややあつて階層主の居なかつた大広間の奥の壁に空いた洞窟——次層の連絡路へと進んだ。

「んく、ようやく休憩く」

傾斜を描く洞窟を抜け、ティオナが一段落とばかりに伸びをする。そして何故かアイズは私の背に跨る。

モンスターが溢れる地下迷宮に相応しくない程の穏やかな光と清純な空気の森。何を隠そう私が永い眠りに就いていた階層である。

「今は・・・どうやら昼のようだね」

手で傘を作り、リヴエリアが頭上を見上げる。

この階層の天井には、無数の水晶が隙間なくびっしりと生え渡つていた。

中心には太陽のように輝くいくつもの白水晶の塊、そしてその周囲には優しく発光する青水晶の群れ。それぞれの水晶が光を放つことで、18階層には地下でありながら空が存在している。この空は時間経過によつて水晶の光量が落ちていき、朝、昼、夜、の

時間帯を作り上げているという。

「ねえねえ、どうする？このまま19階層に行っちゃう？」

「街に立ち寄る方が先よ。来るまでに集めたこのドロップアイテムを売り払つておかないと、どうせすぐに荷物が一杯になるわ」

アマゾネス姉妹が会話を交わす中、私達は現在地である南の森から階層の西部——ダンジョン内に存在する街へと進路を取つた。

結局ここまで私、一度も戦えなかつたなあ

## 27話 発生

木の柱と旗で作られたアーチ門が記す名はリヴィラの街。

中層に到達可能な上級冒険者達が経営する、ダンジョンの宿場街である。

なんでも今までに333回もの異常事態(イレギュラー)の発生によつて崩壊してきたのだという。

そんな中、冒険者達は危機を悟ると街をあつさりと放棄し、地上へと帰還する。

そして全てが打ち壊された後に、再びこの階層で街を作り直していくのだそうだ。よく、その333回の崩壊の間、私は寝たままでいられたものである。何気に私一番なんじやなかろうか？

そんな事を考え歩いていると、天然の洞窟を活用しているらしい酒場の前を通り過ぎる傍ら、レフィィーヤが今後の予定を確認するように口を開く。

「取り敢えず魔石やドロップアイテムを引き取つてもらつて、それから……え？」  
 「グルウ……」  
 「ロボ？ どうしたの……？」

血の臭いがする。それもかなり強い臭いだ。

ダンジョンの中にある街なのだから、血の臭いがするのは当たり前なのかもしないけど、それにしても怪我で出せる臭いの濃さじやない。

「街の雰囲気が、少々おかしい」

「そういえば、いつもより人が少ないような?」

リヴェリアの言葉に、全員が周囲を見やる。

ここまで来てすれ違う冒険者は直ぐに数えられる程度でしかいなかつた。入り口付近では気にならなかつた人気の少なさも、街の中程にある広場に差しかかると、流石に違和感を抱くようになる。

モンスターが産まれないという安全地帯、そして地下迷宮で唯一の街ということもあり、19階層以下を探索する冒険者でリヴィラを拠点にする者は数多く存在する。

常に賑やか、までとはいかないが雜踏とざわめきが絶えないダンジョンの街は、今は閑散と言つていいほど静かだ。

「えーと??どうする?」

「ひとまず、どこかのお店に入ろうか。情報収集も兼ねて、街の住人と接触してみよう

フインの提案を受け、一行は広場から移動する。

よくよく見れば商品を放つたらかしにして空けられている店も少なくない中、天幕でできたとある買取り所に店主の姿を発見し、足を運んだ。

「今は大丈夫かい?」

「ん? おお、ロキ・ファミリアじゃないか。客かい?」

暇そうにしていたアマゾネスの店主に、ああ、フインが答える。

私の背に乗せられていた背嚢からアイズ達が魔石とドロップアイテムを長台に置いていくのを脇目に、フインが世間話をするように尋ねる。

「街の様子がいつもと違うようだけど、何かあったのかい? 口ボも何か感じてるみたいなんだけど」

「・・・ああ、あんた達、今街に入つたばかりなのか」

魔石やドロップアイテムの鑑定をしながらちらりと私を見やつた店主は、辟易したよう言葉を絞り出した。

「殺しだよ。街の中で、冒険者の死体が出たらしい」

うん、なんで今、私をチラ見したの・・・

## 28話 混乱

ダンジョン18階層リヴィラの街、ヴィリーの宿。

事件はそこで起きたのだという。

被害者は全身型鎧の冒険者であり

最後に目撃された時は、ローブの女を宿に連れ込んだという。

名前は剛拳闘士ハシャーナ・ドルリア。

所属はガネーシャ・ファミリア。

Lv. 4の冒険者らしい。

これが

死体の発見当時、頭部を潰されている状態で見つかったため、<sup>ステイタス</sup>開錠薬<sup>ステイタス・シーフ</sup>という、普段は隠されている眷属の恩恵を暴く道具によって判明した情報である

連れ込んだ女が消えていることから考えて、犯人はその女だというのが一番の候補である。

フィンが現場検証をした結果女の目的は、ハシャーナの持っていたであろう特定の荷

物を狙つて近付いたらしい事。かなり乱暴に他の荷物を荒らしていたことから、当時その荷物を持つていなかつた事。

そして、発見された一枚の血塗れの羊皮紙——冒險者依頼の依頼書から、内密に30階層から単独で何かを採取しに来ていた事が判明し、それが狙われた物であろうと判断された。

荷物を手に入れられていないなら近くにまだ潜んでいる可能性が高いとされ、街が封鎖される流れとなつた。

ということを私はずっと外で待機させていた為、現場検証終了後にアイズから聞かされた。

リヴィラの街で買い取り屋を営む上級冒険者であり、事実上の街の大頭でもあるボルス・エルダーによつて封鎖命令が下された街の中は、いつになくざわめきと動搖が伝播していた。

「集まるのが早かつたね」

「呼び掛けに応じねえ奴は、街の要注人物一覽に載せるつて脅したからな。そうな

（ラツクリスト）

りや何処の店でも即叩き出した。このを今後も利用してえ奴等は、嫌々でも従うつてもんよ」

「それに、一人でいるのは恐ろしい、か」

ああ、とフインの呟きにボールスは頷く。

視線の先で揺れ動く人集りは、程度の違いこそあれ、その顔に不安と恐怖を抱えていた。

既にボールスの口から第二級冒險者ハ シャー ナが殺害されたことは伝えられている。第一級冒險者に相当する殺人鬼が街の何処かに潜伏しているとなれば、個人行動を危惧するのは当然の成り行きと言える。

場所は街の中心地である水晶広場。

広場の中央には大きな白水晶と青水晶の柱が双子の様に寄り添つており、その側には血塗れの全身型鎧を始めとしたハシャーナの私物も運び込まれている。

「お前等以外の第一級冒險者が見つかりやあ、分かりやすかつたんだがな・・・」

「最初から騒動を起こすつもりでいたんだろう。変装をしているか、あるいは公式のLV.を偽っているのか・・・安易に疑われない対策の一つや二つは取っている筈だよ」

「相手も馬鹿じやねえか」

ざつと数えても、集まつた人数は街の住人を合わせ五百に届く。しかし、調べる対象は女の冒険者のみとすることから半分以下にまで絞ることが出来る。

「ステイタス・・・LV. を確かめさせてもらうのが一番手っ取り早いが、流石にそれは情報秘匿の規則<sup>ルール</sup>に違反する」

「我が物顔で調べれば、都市中のファミリアから反感を買ってしまいますしね」

やがて、集められた冒険者達は男性と女性に分けられていく。二百名程の女性冒険者達はアマゾネスの種族が多かつた。

ある女戦士<sup>アマゾネス</sup>はやましいことは何もないとばかりに胸を張り、ある猫<sup>キャット</sup>人の少女<sup>ビルブル</sup>は居心地悪そうに肩をすぼめ、細い尻尾を落ち着きなく動かしていた。

現在、18階層は昼。

広場に設置されている階層時間帯のおおよその経過を知らせる砂時計が落下する砂

を残り僅かとする中、準備は整つた。

「まずは無難に、身体検査や荷物検査といったところかな」「うひひつ、そういうことなら・・・」

フインの助言に嫌らしく笑うボールスは、顔を上げて女性冒険者達に叫んだ。

「ようし、女どもお?!体の隅々まで調べてやるから服を脱げエツプ!?

あまりにも下品な発言を途中で私が後ろから踏んで黙らせる。

「ありがとう、ロボ。お前達、我々で検査をするぞ。ロボはそのまま男共を押さえておいてくれ」

リヴエリアが私に礼を言い検査を受け持つため歩み出る。声を掛けられたアイズ達（アイズは私の背中から降りて）リヴエリアの後に従つた。

男性冒険者が余計なことをしないように見ていたが、女性側の方で騒ぎが起きた。

『フインが押し倒されたぞ！』

「いや、お持ち帰りされたー！」

「うがアああああああああああああああああああああああああああ!!」

バ  
ル  
ウ  
ミ  
ム

男性冒険者の悲鳴が響き渡り、続いて小人族の少年が連れ拐されていく。怒り狂つたティオネが妹の拘束を振り解き、街の広場は大混乱に陥つた。

「うん、と・・・口ボ、助けて」

ああ、もう何が何だか……」

犯人捜しどころではなくなつた目の前の光景に、アイズとレフイーヤは頭を痛め、アイズは私に助けを求め首に手を回し抱き付いてくる。

りに充満した。

しかし、此處には私がいる。アイズに頼られてやる気満々になつた私がいる。

「ガルアアアアアアアアアア！」

広場に咆哮が響き渡る。締まらない雰囲気が一気に霧散し代わりに緊張感が辺りに充満する。

広場の視線が全て咆哮の先、私に集まる中、人混みの中からとある人物を捉えた。

中型の小鞄ボーチを携えた、犬シアンスロープ人の少女だ。

小麦色の肌の顔を、今は病氣かと見粉うほど青白く染めている。

動きを止め他の全ての視線が私に向くなかで、唯一双子水晶のある広場の中心地を愕然と見つめたまま、震え、怯えている。

彼女は後退りした後、集団の視線が集中しているのを利用するよう、素早く広場から逃げ出した。

「――ロボ、追つて」

「ワフ！」

「わ、私も行きます！」

明らかに不審な行動を放置する選択肢はなかつた。  
アイズとレフィーヤを背に乗せ、少女の後を追つた。

## 29話 宝玉

18階層の水晶の空は、昼から夜に移り変わろうとしていた。森林や大草原にそそぐ暖かな白い光は見る見る内に失われていき、階層全体が暗くなり始める。

階層西部、湖の島に築かれたリヴィラの街もまた、蒼い薄闇に覆われようとしていた。

「はっ、はっ・・・!?

周囲が暗くなる一方で足元から生える青水晶がうつすらと輝きを放つ中、獣人の少女が視線の先で錯綜する岩の路地を走っていた。

息を切らしながら背後を振り返り、私と視線がかち合う。追跡者である私を震える瞳に写し、動転しているように、彼女は前を向いて逃げ続けた。

「ロボ、このまま追つて・・・回り込むから・・・。」

中心地である水晶広場から北西、外壁を近くにする街の片隅でアイズが耳元で囁き飛び降りて行く。

坂や階段を駆け上がり、レフイヤを背に犬人を追いかける。肩に掛けている小鞄を揺らしながら再度振り返り怪訝な表情を浮かべ、曲がり角を折れて行つた。

追い掛けで曲がると巨大な青水晶と岩壁に挟まれた、まるで谷間のような細い一本道だつた。

長く平らな道の先にはアイズが先回りして現れた。

「えっ!」

行く手に立ち塞がるかのごとく道の真ん中に佇むアイズに、犬人の少女は、逃げ道もない狭い路地の真ん中で、腰を抜かしたようにへなへなと座り込んだ。

「はふうつ、捕まえましたね。流石です」

「ううん。全部口ボのおかげだよ」

犬人である彼女は黒い髪に、頭から垂れた獸耳を生やしていた。健康そうな小麦色の

肌をしており、細い手足は獸人らしくしなやかさに富んでいる。  
編み上げたロングブーツに薄手の戦闘衣バトル・クロスを身に付けており、防具の類は装備していな  
い。

「事情聴取は・・・私達がするより団長達に任せた方がいいですね」

「うん、広場に戻ろう。口ボ、お願いい」

「ワフ！」

拳動不審だつた彼女を怪しい人物と睨み、戦闘衣の襟を咥えフイン達のもとへ連れて  
行こうとした——が。

「やめてっ!?」

「ガフツ!!」

垂れた耳をびくりと動かした少女は、途端に涙ぐみ、顔を振り上げ懇願する。

その拍子に、彼女の後頭部が鼻柱を強打し驚いた私は口を放し前足で鼻を押さえた。

「お願いつ、止めて、あそこに連れていかないで!? あそこに戻つたら、今度は私が、きつと私がつ・・・！」

「ロボ！ あ、あのつ、退いてつ・・・！」

「ちよ、ちよつとつ、何してるんですか!?」

犬人の少女が私に駆け寄ろうとするアイズに縋り付くように両腕を掴み、レフイーヤが慌てて引き離そうとするが、「お願ひ、お願ひつ・・・！」と少女は俯き顔を振るばかりで、掴んだ腕を放そうとしない。

そのあまりにも必死な様子に、流石に困り私達は顔を見合わせる。

「どう、しましようか？」

「・・・ロボ、人のいない場所に乗せてつて  
いいんですか？」

「うん、すごく怖がってるみたいだから・・・落ち着いたら、話を聞こう」

流石にここまで怯えている少女に無理をさせるわけにもいかない訳で、三人を背に乗せて移動した。

向かつた先は北西の外壁を間近にする、街の倉庫と言うべき場所だった。

少女を連れて倉庫の奥に進んだ先、カーゴに囲まれる空き地のような空間で、私達は向かい合つた。

「もう、大丈夫？」

「・・・うん」

カーゴの角に掛けられた灯りが薄暗い周囲を照らす中、犬人の少女はアイズの声に頷き返した。

「貴女の名前は？」

「ルルネ・・・ルルネ・ルーア。L.V. は2。所属はヘルメス・ファミリア・・・」

俯きがちだが質問には答える少女、ルルネは、落ち着きを大分取り戻したようだ。

アイズとレフイーヤが質問を繰り返し、ルルネがハシャーナから荷物を受け取り地上にいる依頼人に届ける依頼を報酬の大金に目が眩み受けていたことが分かり。

荷物を採取する依頼を受けていたハシャーナが殺され、自分も殺されると思つたから怖くなつて広場から逃げ出したとのことだつた。

依頼人は黒尽くめのローブの人物で正体は不明。更には、ルルネがL·v·を主神に偽るように言われ本当はL·v·3だつたことも判明した。

「私達に、その荷物を渡して」

それが一連の話を聞き、アイズが下した決断だつた。

大金と身の危険を天秤にかけていたルルネは、やがて命あつての物種だと、我慢するよう頷いた。

「詮索しないで、絶対に誰にも見せるなつて言われてたんだけど……」

荷物の入つている中型の小鞄を地面に下ろし、中から口紐がきつく締められた袋を取り出した。

ルルネは緊張した面持ちで、袋の中身を取り出す。

「・・・！」

「な、何ですかっ！これっ・・・？」

「グルルルル」

ルルネからアイズに手渡された物は両手に収まる程の球体だった。

緑色の宝玉。薄い透明の膜に包まれているのは液体と――不気味な胎児だ。

アレは駄目なモノだ・・・

目の前にある宝玉が何であるのかは一切分からないが、しかし、私にとつて不愉快なモノである事だけは確かであつた。

「アイズさん！？」

「ガウッ！」

急に膝をついたアイズを体で支える。拍子に宝玉はアイズの手から零れ落ち地面を転がる。

アイズの異常の原因を察し、レフィーヤは飛び付くように宝玉を拾い上げ、アイズか

ら距離を置く。

「大丈夫ですか、アイズさん」

「・・・うん、平気。口ボも、ありがとうね」

どこか弱々しい声で、アイズが私に跨る。  
手元の宝玉を見下ろすレフイーヤ。

「だ、大丈夫なのかよ・・・や、やつぱりコレ、やばい代物だったのかつ？」

怯えたようにルルネが尋ねてくる。

その答えを私達は持ち合わせていながら、レフイーヤが決断したかのように頷いた。

「私が持つて、団長に渡します」

「ごめん、レフイーヤ・・・」

「謝らないでください、こんな時くらい私が・・・アイズさんは、離れていてください。

「口ボさん、 アイズさんをお願いします」  
「ワフツ！」

精一杯であろうに笑みを浮かべるレフイーヤに頷く。  
レフイーヤは領き返しルルネから袋と小鞄を受け取りその中に宝玉を仕舞つて肩に  
担いだ。

「それじゃあ、行きましよう——」

直後だつた。

遠方から何かが崩れる音と、悲鳴、そして破鐘の咆哮が届いてきたのは。

「!？」

三人共を急いで背に乗せ、弾かれるように駆け出す。

倉庫を後にし、来た道を背のレフイーヤ達を落とさないように気を付け駆けて行く  
と、視界が一気に広がる突き出た高台に出た。

手すりの設けられた見晴らしのいい場所に出た瞬間、私達の目に飛び込んできたのは街の方々から上がる煙、そして。

「あれは……!?」

空高く首を伸ばす、無数の憎き植物型のモンスターだつた。